

トが掘り込まれてかなりの凹凸が認められている。

遺物には、土師器の細片が出土しているにすぎず時期的判断はしがたいが、7Gr以西の他の遺構と覆土がほぼ同様であることから、古墳時代前期から中期にかけて築かれた遺構である可能性が高い。

遺構の性格は、遺構内に存在するピットが何らかの機能をもつものと考えられるが、現状からは判断しがたい。

#### A9Gr SX04（第82図）

調査区の西端、9～10Grの地山である褐色シルト質土上面で検出した落ち込み状遺構である。上部は削平されているものと考えられるが、西側及び北側は調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では、長軸長3.16m以上、短軸長70cmを測り、南北に細長い形状を呈している。なお、検出高は標高2.20mである。

覆土には、固くしまりのある灰色土が堆積し、この層には5mm～1cm大の粗砂が多く認められる。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はわずかな凹凸が認められるが、全体に約3cm程度の深さしかなく、浅いものである。

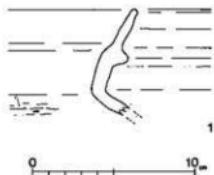
出土遺物は土師器細片のみで時期的判断ができないが、A8Gr SX01の覆土とよく似ており、同時期に築かれた遺構である可能性が高い。なお、現状からは遺構の性格は判断しがたい。

#### A1Gr P03（第83図）

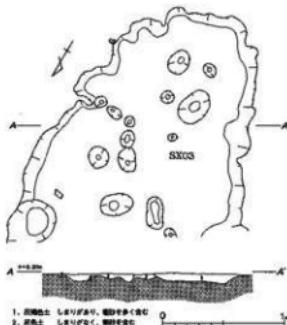
調査区の東端、1Grの地山である褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、長軸長33cm、最大幅17cmを測り、やや南側に偏って張出す楕円形状を呈すもので、基軸を北東～南西方向にもっている。なお、検出高は標高2.10mである。

覆土には、上層に褐色粒子や砂利を含む暗褐色粘質土、下層には褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は狭く、丸くおさまっている。

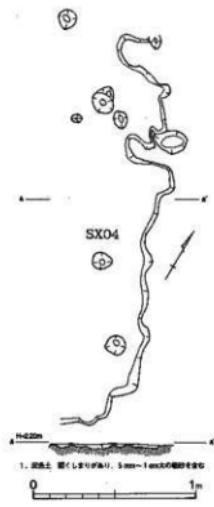
遺物は出土しておらず、遺構の築かれた時期や性格については判断しがたいが、II区からIII区東側で検出した遺構には覆土内にほぼ一様に褐色粒子を含む褐色系土が認められていることが注意される。そして、これらの遺構内からは、古墳時代中期頃に相当する遺物が検出されていることから、当該期のものである可能性が強い。



第80図 A8Gr SX01出土遺物実測図



第81図 A9Gr SX03実測図



第82図 A9Gr SX04実測図

また、周辺に築かれたピット状遺構との間には、掘立柱建物跡などの配置は認められず、性格は不明である。

#### A2Gr P14 (第84図)

2Grの褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、径約35cmを測る円形状を呈しており、検出高は標高2.23mである。

覆土には、上層に褐色粒子を含む暗褐色粘質土、中層には褐色粘質土、下層には黒褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、東側では鋭角に、西側では約45度の角度で落ちて、東側では上面よりも内側に入り込んで袋状に作り出している箇所も認められる。底面は北側では一段深く掘り込んでいるが、ほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは18cmである。

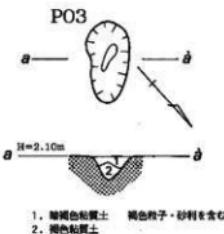
遺物は出土していないが、他の遺構の配置や覆土などから考えると、古墳時代中期頃に築かれたものと考えられる。なお、他のピット状遺構との間には、掘立柱建物跡などの配列は認められず、性格は不明である。

#### A4Gr P02 (第85図)

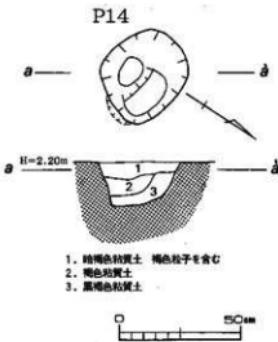
4Grの褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、径約33cmを測るほぼ円形状を呈すもので、検出高は標高2.00mである。

覆土には、上層に褐色粒子を含む暗褐色粘質土、中層に褐色粘質土、下層に黒褐色粘質土が堆積し、この覆土の状況は、前述したA2Gr P14と同様である。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちて、西側では上面よりも内側に入り込んで袋状に作り出している部分も認められる。底面は、わずかながらピット状にさらに掘り込んでいる箇所も認められるが、ほぼ平坦に作り出し、最深部までの深さは22cmを測る。

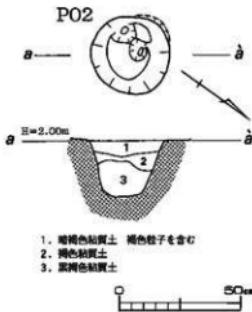
遺物は出土していないが、付近に所在する他の遺構から考えると、古墳時代中期頃に築かれたものであろう。また、遺構の配置を考えると、P02から南方には1.5m間隔で2つの同じような規模のピット状遺構が検出されていることから、何かを区画するための柱列、柵列のような施設があった可能性もある。



第83図 A1Gr P03実測図



第84図 A2Gr P14実測図



第85図 A4Gr P02実測図

#### A6Gr P09 (第86図)

A6Grの地山である褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、長軸長70cm、最大幅55cmを測るいびつな形状を呈しており、特に西側では浅く不整形である。なお、検出高は標高2.13mである。

覆土には、上層に炭化物を多量に含み、砂利を多く含む黒褐色土・黒褐色粘質土が、中層には褐灰色粘質土・褐色土、下層には粒子のやや細かい褐色土が堆積している。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちているが、南側では上面よりも内側に掘り込んで袋状となっている。底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは40cmを測る。また、西側では深さ約5cmで一旦平坦面を作り出し、そこからさらに底面へと向かって落ちている。

遺物には、古墳時代中期頃と考えられる土師器小片が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期と考えられる。

遺構の性格は判断しがたいが、付近に存在するピット状遺構が10~20cm程度の深さであるのに対し、この遺構は約40cmの深さがあることから、異なる機能をもつものと考えられる。なお、5~6Grにかけての遺構の覆土には、特に上層で炭化物が多量に認められており、この地域で何らかの要因により物を燃やしたか、あるいは焼失を受けたものと考えられる。

#### A6Gr P125 (第87図)

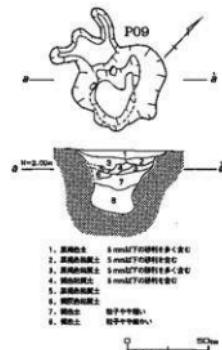
A6Gr北寄りの褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、長軸長78cm、最大幅35cmを測り、南南西~北北東に基軸を向けた細長い形状を呈している。なお、検出高は標高2.18mである。

覆土には、上層に炭化物や砂利を含む褐色粘質土、下層に砂利を含む明褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しているが、北側では一段深く掘り込んで、最深部までの深さは20cmを測る。

遺物は出土していないが、付近に所在する他の遺構から考えると、古墳時代中期頃に築かれたものと考えられる。また、他の遺構との間には掘立柱建物跡などと考えられる配列は認められず、遺構の性格は不明である。

#### A8Gr P01 (第88図)

A8Grの地山である褐色シルト質土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは、西側に小さい張出し部をもつものの、径約32cmほどの円形状を呈している。なお、検出高は標高



第86図 A6Gr P09 実測図



第87図 A6Gr P125 実測図

2.12mである。

覆土には、上層に砂利を多く含む灰色土・灰色粘質土、中層には褐色土・暗褐色粘質土、下層にはやや粘性の強い暗灰色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部からほぼ垂直に落ちて底面は平坦に作り出している。また、北側では袋状になっている部分も認められ、最深部までの深さは29cmを測る。

遺物は出土しておらず、時期的判断は難しいが、SD01の西側に配置される遺構には、A8Gr SX01で検出されたように古墳時代前期の遺物が多く認められている。また、覆土には砂利を含む灰色系の土が一様に堆積していることから、東側の遺構よりもやや早い時期に築かれたものと考えられる。

そして、P01は西南西-東北東に配置されるほぼ同規模のピット状遺構と約1.6m間隔で一列に配置されていることから、何かを区画するための柱列や柵列のような機能をもつ可能性もある。

#### A7～A9Grのピット列（第89図）

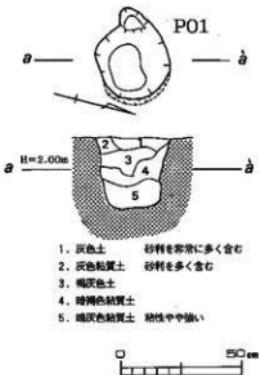
7～9Grのピット状遺構の中には、掘立柱建物跡などの配置は認められないものの、ほぼ一定間隔で一列に配置されるピット列が検出されている。そして、付近に多数存在する径5cm程度の小ピットからはプラントオバールが検出され、稻作が行われたことが明らかとなっている。以上のことから、これらのピット列はそれぞれ築かれた時期に若干の差が生じていると考えられるものの、水田を区画するための柱列や柵列などとして機能していた可能性がある。

a-a'には、径30cmほどの3つのピット状遺構が約1.6mの間隔で一列に配置されている。基軸は西南西-東北東を向いており、底面におけるレベルは約1.85mとほぼ一定である。また、ほぼ垂直に掘り込まれ、覆土も似ていることから、同時期に築かれたものと考えられる。時期的にはA7Gr P01からは古墳時代前期から中期頃と考えられる土師器壺片が検出されており、当該期のものである可能性が高い。

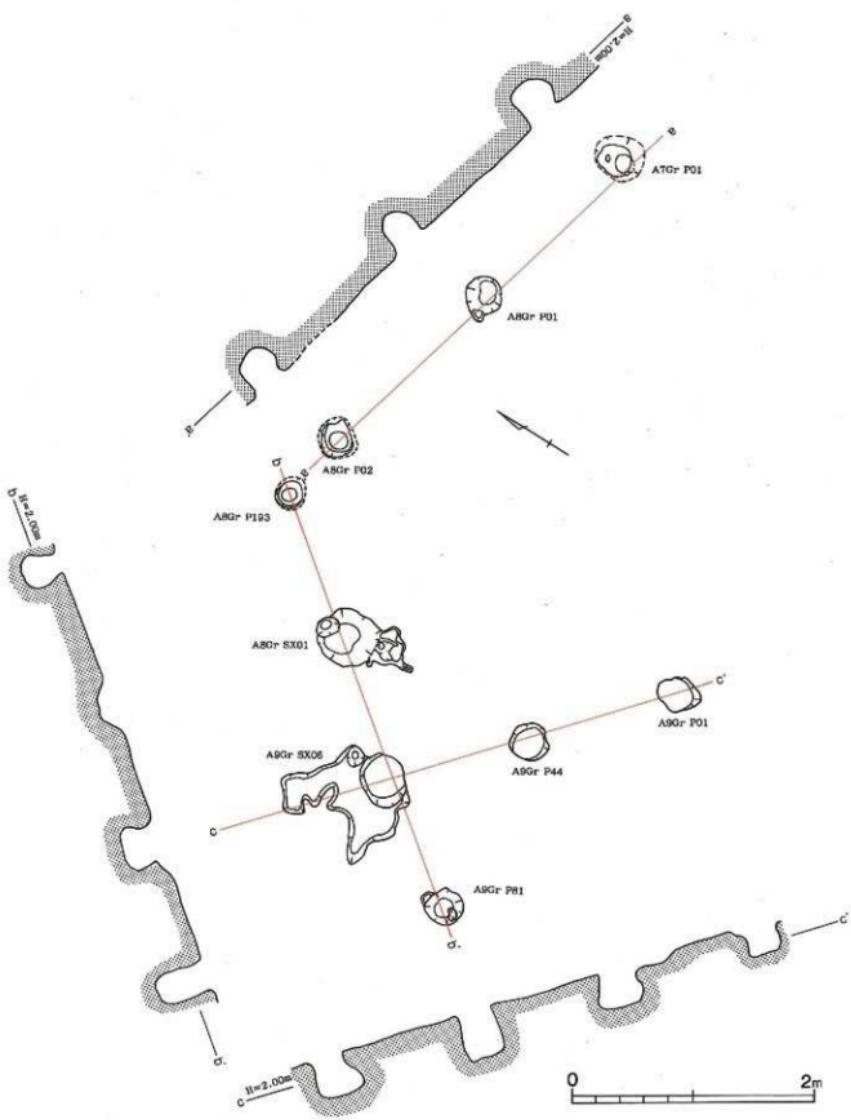
b-b'には、形状や大きさが異なるものの約1.2mの間隔で4つのピット状遺構が一列に配置されている。基軸は北東-南西方向を向いているが、底面のレベルには2.05m～1.70mとかなりのバラつきが生じている。しかしながら、A8Gr SX01とA9Gr P81からは古墳時代前期と考えられる土師器壺片が出土しており、ほぼ同時期に築かれたものであろう。

また、c-c'は、b-b'とほぼ直交して北西-南東方向に基軸をもつ4つのピット状遺構が配列されている。b-b'と同様に1.2mの間隔で配列され、底面におけるレベルはA9Gr P01が1.90mとやや浅いが、その他は約1.80mとほぼ一定である。

以上のように、これらのピット列には底面におけるレベルが一定でないものも認められている。し



第88図 A8Gr P01実測図



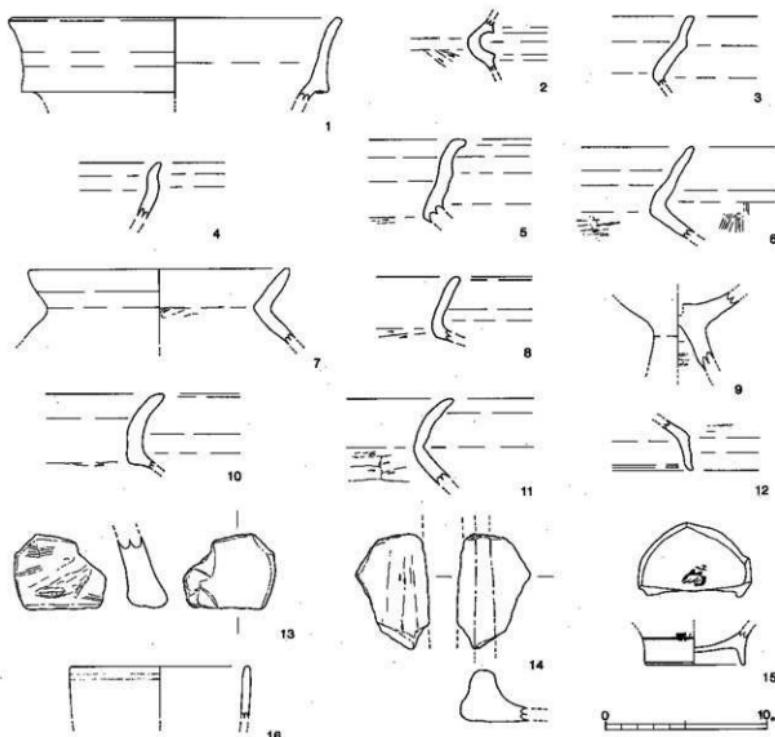
第89図 7~9Grビット列検出状況実測図

かしながら、後世の耕作による削平などを考慮すると、柵列や柱列として機能していた可能性はあろう。また、直交するb—b' c—c'については同時期に築かれた可能性の強いものである。

#### 遺構外の出土遺物（第90図）

1は、複合口縁をもつ壺である。器壁は厚く、複合口縁の稜はやや下方に突出し、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。なお、この遺物はA9Gr P02からの出土で、調査区の西側ではこのような弥生時代終末期から古墳時代初頭頃と考えられる遺物がわずかながら検出されている。このような傾向はI区でも確認されており、井原遺跡における1つの特徴となっている。

2は、鼓形器台の筒部付近の破片であろう。外面はナデ、受部内面はミガキ、脚部はケズリによる調整が行われている。1と同様に弥生時代終末期から古墳時代初頭に相当する資料であろう。



第90図 遺構外出土遺物実測図

3～8・10・11は、土師器壺である。3は、複合口縁の稜はやや鋭さを欠いている。口縁端部は平坦におさめ、口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。4は、口縁部のやや上位に膨らみをもち、口縁端部は外反して先細りとなっている。5は4と同様であるが、器壁が厚いのが特徴である。

以上のような土師器壺は、3がやや古く古墳時代前期の様相を示すものであるが、その他は古墳時代中期頃の資料であろう。

6は、口縁部のやや下位にわずかに膨らみをもち、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。7は、口縁部中位にわずかな膨らみをもち、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下内面はケズリによる調整が行われている。8は単純口縁に近いもので、口縁端部は平坦におさめている。10は単純口縁の壺で、口縁端部は外反し、丸くおさめている。11もほぼ同様であるが、口縁端部は先細りとなっている。

以上のような壺は、6～8がやや古い様相を示すものと考えられるが、おおよそ古墳時代中期頃に相当する資料と考えられる。

9は、土師器高坏である。外面と坏部内面には赤色塗彩された痕跡が残っており、坏部と脚部とは円盤充填法により接合されている。筒部内面はケズリによる調整が認められるが、その他は風化が著しく不明である。

12は、須恵器坏蓋である。長めに伸びる口唇部をもつもので、口縁端部はやや外傾して丸くおさめ、内側には沈線が入っている。このような特徴をもつ坏蓋は、山本編<sup>(1)</sup>年I期に相当する資料と考えられる。

13・14は移動式壺である。13は脚部破片で、脚端部は外方に突出して太くなっている。外面はナデ、内面の一部には横方向のハケによる調整が認められる。14は焚口側面の破片で、外面はナデ、内面はケズリによる調整が行われている。

以上のような移動式壺は、II区SD01内から多量に出土しているが、井原遺跡においては出雲地方では最も早い段階の古墳時代中期頃に導入されたものと考えられる。

15は磁器の高台付碗である。高台部は直立し、外面の底部付近には紺色の直線と文様を染付けている。内面底部にも文様が認められ、全面に淡緑灰色の釉がかかっている。

16は、胸胎染付の碗である。口縁端部は丸くおさめ、外面上位に2条の直線を染付けている。内外面ともに淡灰色に施釉されている。

以上のように、III区では少量ながら遺物が出土しているが、そのほとんどが古墳時代前期から中期にかけての資料である。

### III区 出土遺物観察表（土器）

発掘番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
80-1	A8Gr SX01	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／ナデ 内／ケズリ	褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	普通	口縁部平坦におさめる
90-1	A9Gr P02	陶土器 壺	20.6	-	-	口縁部内外面ナデ	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	外面スス付着
-2	A9Gr 灰色土	拭土器 器台	-	-	-	外／ナデ 内／受部ヒガキ、脚部ケズリ	橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
-3	A6Gr 灰色土	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 口縁部を平坦におさめる	淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
-4	A1Gr 暗褐色 粘質土	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ	外／褐色 内／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
-5	A4Gr 黒褐色 土	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／不明 内／ケズリ	外／深褐色 内／淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
-6	A5Gr 黒褐色 土	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	
-7	A6Gr 灰色土	土師器 壺	16.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／不明 内／ケズリ	橙褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	不良	
-8	A5Gr 黒褐色 土	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／不明 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
-9	A6Gr 灰色土	土師器 壺	-	-	-	外／風化著しく不明 内／箇部ケズリ	褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	普通	外側と坏部内面に赤色並彩表現る 円盤充填法
-10	A4Gr 黒褐色 土	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／不明 内／ケズリ	褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母を含む	普通	
-11	北側溝	土師器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頭部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	灰色	密 石英・雲母を含む	やや 不良	
-12	A4Gr 黒褐色 土	須恵器 壺	-	-	-	外／回転ナデ 内／回転ナデ	外／淡褐色 内／褐色	密	良好	外側上方に自然釉がかかる
-13	A6Gr 灰色土	土師器 壺	-	-	-	外／ナデ 内／ケズリ、一部ハケ	淡褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	

博認番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
90-14	A6Gr 灰色土	土師器 甕	—	—	—	外／ナデ 内／ケズ)	外／褐色 内／橙黄色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・葉母を含む	良好	
-15	A9Gr 灰褐色土 高台付 甕	—	6.2	—	—	内外面ナデ、淡緑灰色に施釉 外面に2条の線を染付	内外面／ 淡緑灰色 断／白色	密	良好	坏部内面底部に文様染付
-16	A9Gr SEC 周胎染 付甕	11.2	—	—	—	内外面ナデ 口縁部付近に2条の直線を染付	内外面／ 淡灰色 断／灰褐色	密	良好	内外面を淡灰色に 施釉

註

(1)『島根大学開学十周年記念論集』「山陰の須恵器」 山本清 1960年



## **VI. N区の調査**

## VI. IV区の調査

### 1. 発掘調査の概要

調査地は、以前には養豚舎が建っていたことが知られ、周辺の水田と比べると約1m程度高くなっていた。調査に入る前に、造成土とII区で確認されていた遺物包含層までを重機によって取り除き、排土した。そして、東西に5m、南北に2.5m間隔のグリットを設定し、東から1~5Grとした。調査面積は、東西約18m、南北約3mの約54m<sup>2</sup>である。なお、水処理のために調査区を囲むように約30cmの幅で側溝を設定している。

#### 層序（第91図）

造成土を除くと、その下面には40cm程度の堆積土が確認されている。なお、3Grには埋設された排水管が通っており、その下面是調査できなかった。

基本的な層序は、上層に水田耕作土である灰褐色土、中層には褐色粒子を含む褐色砂質土、下層には粒子の細かい暗褐色砂質土が堆積して、基盤層である緑灰色シルト質土へと達している。この緑灰色シルト質土は、II区では灰白色シルト質土、I区東側では黄褐色シルト質土に対応するもので、検出高は標高約2.00mである。

#### 遺構（第91図）

遺構は、井戸1、落ち込み状遺構1のほか、ピット状遺構を多数検出している。また、遺構としては捉えていないが、2Grでは下層に堆積する暗褐色砂質土が10cm程度落ち込んでいる。遺構が築かれた時期はいずれも古墳時代中期頃と考えられ、I区東側と同様の状況を示している。

このうち、SE01は井戸枠をもつもので、多くの遺物を検出している。また、井戸を廃棄する際に土器を投入して祭祀を行ったものと考えられ、I区の井戸との関連や当時の人々の生活を知るうえで貴重な資料となっている。

#### 遺物

遺物は、造成土を除く全ての層に包含しており、土師器壺・塊・高壺、須恵器壺身・壺蓋などが出土地している。

SE01からの出土遺物が最も多く、その中には内面に暗文が施される土師器塊や意図的に割られたと考えられる壺など特徴的な遺物が出土している。また、SX01付近からはセット関係をもつ須恵器壺蓋が出土している。山本編年I期に相当する資料で、出雲平野の集落遺跡からはほとんど出土していないものである。

## 2. 遺構と遺物

遺構は、その全てが古墳時代中期頃に築かれたものと考えられ、井戸1、落ち込み状遺構1のほかピット状遺構を多数検出している。

### SE01（第92図）

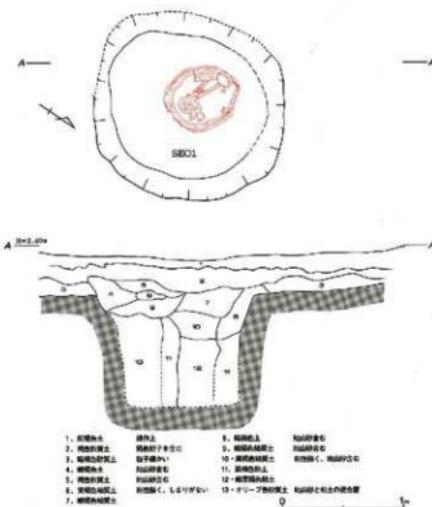
調査区のほぼ中央、3Grの緑灰色シルト質土上面で検出した井戸である。西側は排水管が埋設されていたため一部を調査することができなかったが、東西長約1.50m、南北長約1.70mを測り、南北にやや長い楕円形状を呈している。なお、検出高は標高1.98mである。

覆土には、上層に4~10層が堆積しているが、いずれも地山である緑灰色シルト質土を含むもので、井戸を廃棄する際に人為的に埋められたものと考えられ、付近の堆積層には認められない黄褐色粘質土・暗褐色粘質土など粘性が強く、しまりのない土が認められる。

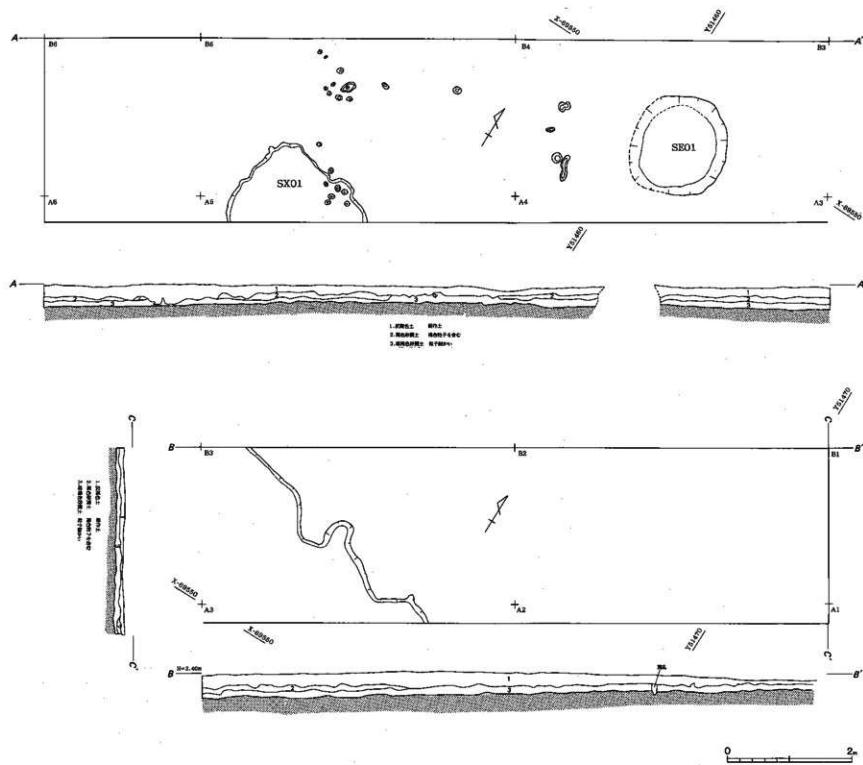
また、遺構内には井戸枠が設置されていたが、井戸枠を取り囲む南側の下層には地山ブロックと粘土の混合層であるオリーブ色砂質土が一様に堆積している。このオリーブ色砂質土が、遺構の北側では認められないことを考えると、SE01は南側から大きく掘り込んでやや北側に井戸枠を設置し、その後に大きくあいた南側を人為的に埋め、井戸枠を固定したものと考えられる。一方、井戸枠内の下層には、周囲に黒褐色粘土、中央に暗黒褐色粘土が堆積している。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちて底面は平坦に作り出しており、最深部までの深さは約1.20mである。なお、最深部は灰白色粗砂層にまで達し、この層位からは現状でもかなりの湧水がある。

遺物は、8層で土師器が1点検出されているが、その他は全て最下層からの出土で、湧水のために正確な出土位置は記録できなかった。この中からは、少なくとも5個体以上の土師器が検出されており、井戸を廃棄する際に投入され、祭祀を行ったものと考えられる。また、これらの土器は一様に古墳時代中期頃の特徴を示していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。

井戸枠は杉を使用したもので、上部はかなり破損しているものと考えられるが、高さ約90cmを測る(第93図)。杉の原材を2つに割り、それぞれを割り抜いて組合わせたものと考えられ、現状から推測すると径50~60cmの原材を使用したものであろう。なお、突き刺さった状態で3本の杭状木製品が検出されているが、これ



第92図 SE01実測図



第91図 IV区造橋配置図

は井戸枠を支えていたものと考えられる。

井戸枠を検出していることからも井戸として利用されていたことは明らかである。そして、井戸を廃棄する際に土器を投入し、祭祀を行っていた可能性が高く、その後人為的に埋められたものと考えられる。また、意図的に割られた土器は、井戸を神聖視していた当時の精神的背景が窺え、興味深い。

#### SE01の出土遺物（第94図）

1は、土師器壺である。口縁部のやや上位にわずかに膨らみをもち、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面全体にススが多量に付着している。また、頸部下

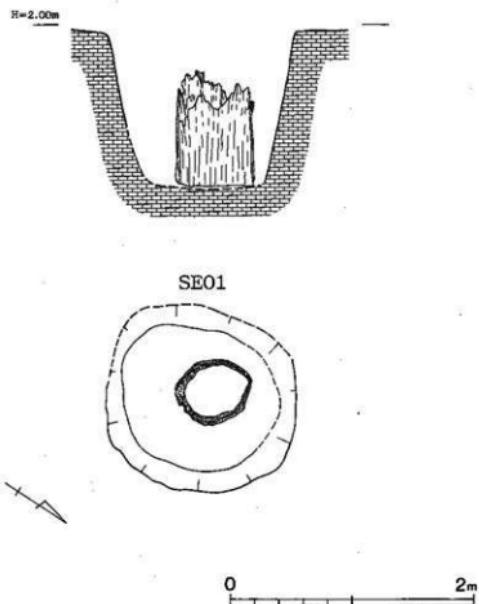
の約半分が全く存在せず、意図的に割られたと考えられるものである。その特徴から、古墳時代中期頃に相当する資料であろう。

2は、単純口縁の土師器壺である。頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデと横方向のハケ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、1と同様に外面には多量のススが付着している。3は壺の口縁部の破片で、口縁部のやや上位にわずかな膨らみをもち、口縁端部は丸くおさめている。4は、口縁部の中位に稜をなし、口縁端部はやや外反して丸くおさめ、内側にフラットな面を作り出している。内外面ともにナデによる調整が行われ、外面にはススが付着している。

以上のような土師器壺は、口縁部の作り方や端部のおさめ方に様々なバリエーションをもつものであるが、およそ古墳時代中期頃に相当する資料と考えられる。

5は、土師器高杯あるいは鉢であろうか。内湾しながら立ち上がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。外面はやや粗いナデと上位には縦方向のハケ、内面はナデによる調整が行われている。

6は、土師器壺の底部から胴部にかけての破片である。丸底をもち、胴部にかけて球形状に立ち上がっている。外面は縦・横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われ、外面には多量のススが付



第93図 SE01井戸枠検出状況実測図

着している。また、器高6cmほどの高さで半球形状に切断された状態になっており、意図的に割られたものと考えられる。I区で検出した井戸の中からも意図的に穿孔されたと考えられる土器が出土しており、井戸を神聖視していた当時の人々の精神的背景が窺える。

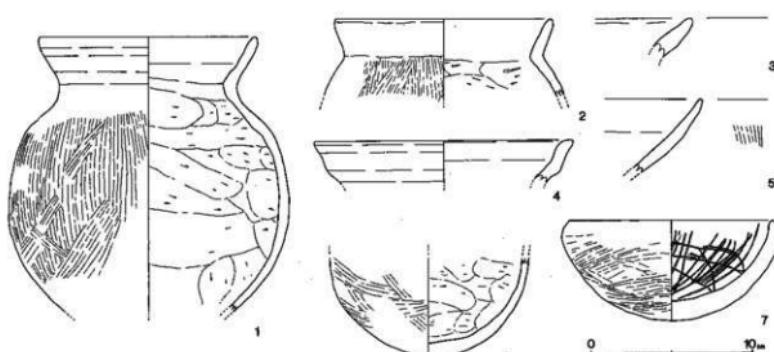
7は、土師器塊である。底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。完形で全面が赤色塗彩され、内面には暗文が縦横に入っている。外面は縦・横方向のハケ、内面はナデとミガキによる調整が行われている。このような特徴をもつ塊は、古墳時代中期頃に相当する資料であろう。なお、この塊はSE01の肩部上層に堆積する暗褐色土中から出土している。他の遺物が最下層からの出土であることを考えると、特異なあり方で、埋土した後に置かれたものと考えられる。

以上のように、SE01からは多くの遺物が出土しているが、時期的には総じて古墳時代中期頃に相当するものである。

#### SX01（第95図）

4Grの粒子の細かい暗褐色砂質土上面で検出した落ち込み状遺構である。南側は調査区外へと達しているが、検出した状況では長軸長2.20m、短軸長1.22mを測る。検出高は標高2.20mである。なお、南側には排水のための側溝を設けているが、この際にもSX01内と考えられる覆土から遺物を検出している。

覆土には、上層に炭化物を含む黒褐色粘質土、下層にはオリーブ色粘質土が堆積して基盤層である緑灰色シルト質土へと達している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面には若干の凹凸が認められるもののほぼ平坦に作り出し、最深部までの深さは11cmを測る。また、遺構の内外には径10cm程度の小ピットが認められるが、これらはいずれもSX01よりも新しい時期のものである。



第94図 SE01出土遺物実測図

遺物には、土師器壺片が2点出土している。いずれも古墳時代中期頃の資料と考えられ、遺構が築かれたのも当該期であろう。なお、堆積土から考えるとSX01はSE01よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。

南側は調査区外へと伸びており、形状が不明確なために遺構の性格については判断したい。

#### SX01の出土遺物（第96図）

SX01内からは、2点の土師器壺が出土している。

1は、口縁部やや下位にわずかに膨らみをもち、口縁端部は外方に折り曲げて内側にフラットな面を作り出している。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦・横方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。

2は、口縁部には膨らみはもたず、口縁端部の内側にはフラットな面を作り出している。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。

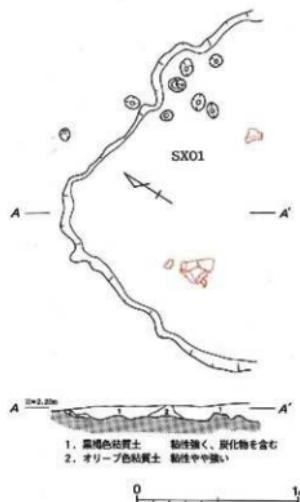
以上のような特徴をもつ土師器壺は、古墳時代中期頃に相当する資料と考えられる。なお、検出面での関係においてはSE01よりも新しい時期の遺物と考えられることから、口縁端部内側にフラットな面をもつ壺は、丸くおさめるものよりもやや後出する傾向にあるものではないだろうか。

#### その他の遺構

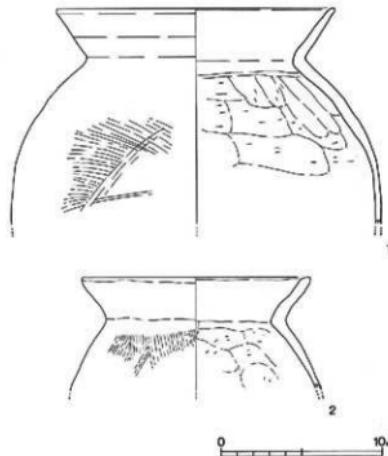
IV区では前述した遺構のほかに、自然地形と考えられる落ち込みの肩部やピット状遺構を多数検出している。

落ち込みの肩部は2Grで検出されたもので、基軸は北西-南東方向に向いている。基盤層である緑灰色シルト質土の上面に広く堆積する暗褐色砂質土は、2Grで約10cm程度落ち込んでいる。3Gr以西での基盤層における標高が2.00mであるのに対し、東側に向かってしだいに上昇し、東端では2.12mとなっている。原因は不明であるが、基盤層が形成された際の自然的な条件によるものであろう。

ピット状遺構は、3~4Grにかけて20余り検出されている。その多くが径10cm程度の円形



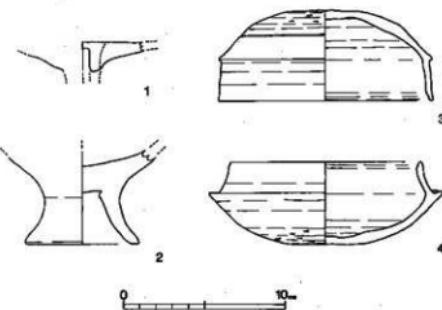
第95図 SX01実測図



第96図 SX01出土遺物実測図

を呈し、杭跡と考えられるものである。出土遺物はなく、時期的な判断はできないが、暗褐色砂質土上面から打ち込まれたものである。なお、これらの杭跡は切合関係からSX01よりも新しい時期のものであることが明らかである。

その他、異なる形状を呈するピット状遺構も検出されているが、出土遺物もなく規模も小さいことから、築かれた時期や性格については不明である。



第97図 IV区遺構外出土遺物実測図

#### 遺構外の出土遺物（第97図）

IV区では、調査面積が約54m<sup>2</sup>と狭いこともあるが、他の調査区と比べると遺構の検出量や遺物の出土量は極めて少ない。

1・2は土師器高坏である。1は、坏部と脚部とは円盤充填法により接合されるものであるが、風化が著しく調整は不明である。2は脚部が短く外傾し、脚端部は丸くおさめている。坏部と脚部とは付加法によって接合され、外面と坏部内面には赤色塗彩された痕跡が残っている。II区SD01内で出土しているように、坏部に深さをもつものと考えられる。

3と4は、セット関係になる蓋坏である。3は坏蓋で、長めに直立する口唇部をもつものである。口縁端部はやや外傾して内側には沈線が入っている。口縁部と天井部には明瞭な段をもち、外面1/3上位は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデによる調整が行われている。4は坏身で、やや内傾して長めに伸びる口唇部を有し、口縁端部はやや外反して内側には沈線が入っている。外面底部は回転ヘラケズリ、内面と口唇部は回転ナデによる調整が行われている。

3・4のような蓋坏は、山本編年I期に相当する資料と考えられ、古墳時代中期頃のものであろう。当該期の須恵器を伴う遺跡は、出雲平野の集落遺跡では少なく、貴重な資料となるものである。

#### 註

(1)『島根大学開学十周年記念論集』「山陰の須恵器」 山本清 1960年

## IV区 出土遺物観察表（土器）

辨別番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
94-1	SE01 下層	土師器 甕	13.4	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	暗褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	外面全体にスス付着
-2	SE01 下層	土師器 甕	13.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
-3	SE01 下層	土師器 甕	-	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
-4	SE01 下層	土師器 甕	15.8	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
-5	SE01 上層	土師器 高輪外象	-	-	-	外／ナデ、縱方向ハケ 内／ナデ	褐色	密 1mm大の砂粒・石 英・雲母を含む	良好	
-6	SE01 下層	土師器 甕	-	-	-	外／縱・横方向ハケ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	外面全体にスス付着
-7	SE01 上層	土師器 壺	12.6	-	6.2	外／縱・横方向ハケ 内／ナデ、ミガキ	外／朱色 内／朱色 新／淡褐色	密 1mm大の砂粒・石英・ 雲母・金雲母を含む	普通	内面に繪文が入る 内外面とも赤色施影
96-1	A4Gr SX01	土師器 甕	17.2	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縱・横方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1mm大の砂粒・石 英・雲母を含む	普通	
-2	A4Gr SX01	土師器 甕	14.0	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／縱方向ハケ 内／ケズリ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	
97-1	A4Gr 暗褐色 砂質土	土師器 高環	-	-	-	内外面とも風化著しく不明	淡褐色	密 石英・雲母を含む	普通	円盤充填法
-2	A4Gr 暗褐色 砂質土	土師器 低脚环	-	7.0	-	内外面とも風化著しく不明	淡灰褐色	密	やや 不良	外側と环部内面に赤 色施影残る
-3	A3Gr 暗褐色 砂質土	須恵器 坏蓋	13.3	-	5.6	外／上半部回転ヘラケズリ 下半部回転ナデ 内／回転ナデ	灰色	密	良好	97-4とセット
-4	A4Gr 暗褐色 砂質土	須恵器 环身	12.0	-	5.1	外／上半部回転ナデ 下半部回転ヘラケズリ 内／回転ナデ	灰色	密	良好	97-3とセット



## **VII. V区の調査**

## VII. V区の調査

### 1. 発掘調査の概要

調査地は近年まで畠地として利用されていたが、現状ではかなりの部分が採土され、周辺の畠地と比べると約50cm程度低くなっていた。このため、現状のまま精査することから調査を開始している。なお、当該地は新内藤川拡幅に伴うポンプ舎の移設予定地である。調査は、東西、南北ともに5m間隔のグリッドを設定し、南からA1～A3Gr、B1～B3Grとした。調査面積は、東西約7m×南北約10mの約70m<sup>2</sup>である。

### 層序

調査区は全面にわたって約50cm採土されていたため、既に地山である黄褐色砂質土が露出している状態で、その上面に堆積する層は確認されていない。しかしながら、黄褐色砂質土はI区西側で確認されていたものと同様に5mm大の砂利を多く含むもので、北側に向かって広く堆積しているものである。なお、VI区の南側も採土され、同じような状況である。

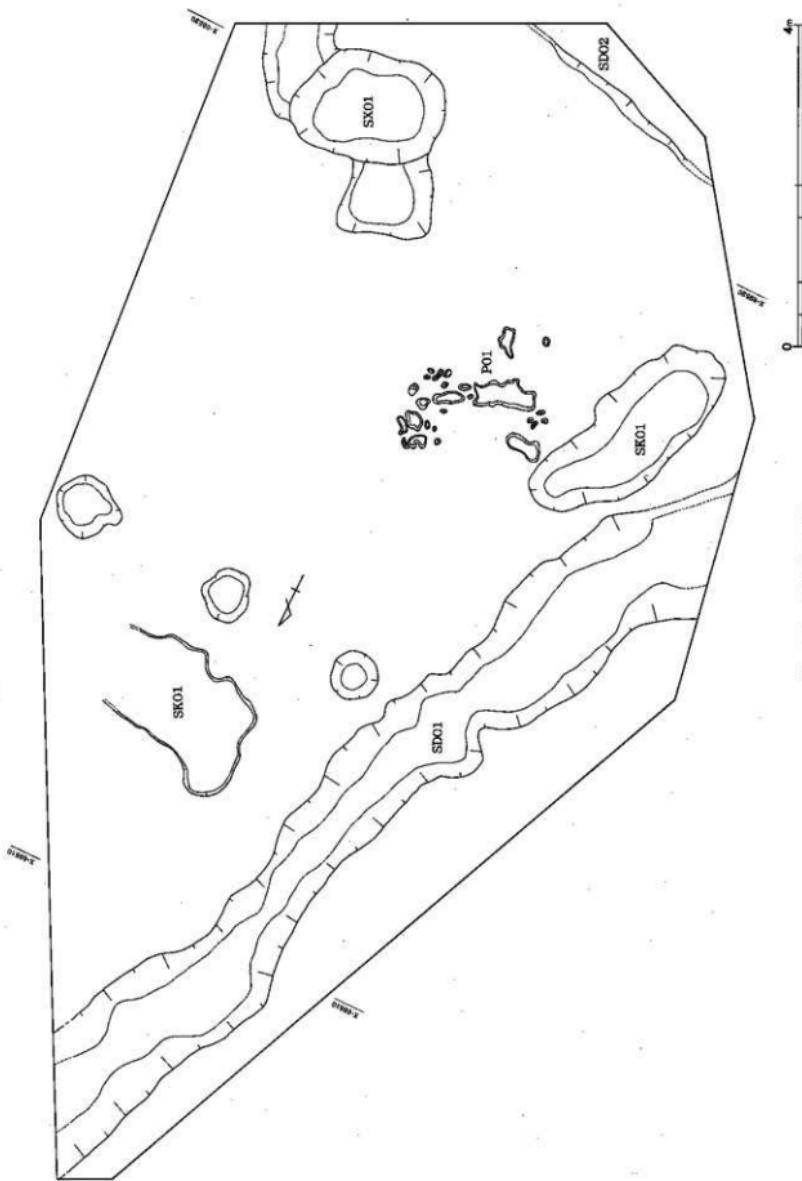
### 遺構(第98図)

遺構は、溝状遺構2、土壤状遺構3、落ち込み状遺構3のほか、ピット状遺構を多数検出している。出土遺物が少なく、遺構が築かれた時期が不明なものが多いが、I区やVI区での遺構検出状況から考えると、弥生時代終末期から近世に至るまでの遺構が含まれているものと推測される。

このうち、SD01は溝の中央部に人頭大の石を配置した遺構で、1点のみではあるが弥生土器の甕の底部が出土していることから、当該期の遺構と考えられるものである。しかし、V区の遺構は総じて上部にかなりの削平を受けており、部分的に底部が残っている程度で、残存状況は良くなかった。

### 遺物

遺物は2点のみの出土であるが、いずれも弥生時代中期から後期頃と考えられるものが出土している。I区やVI区においても遺構に伴うものではないが、弥生時代中期から後期の遺物がわずかながら出土している。このことを考えると、調査区の西側に弥生時代中期から後期にかけての集落が存在していた可能性が高く、今後も注視していく必要がある。



第98回 V区逮捕犯図

## 2. 遺構と遺物

### SD01 (第99図)

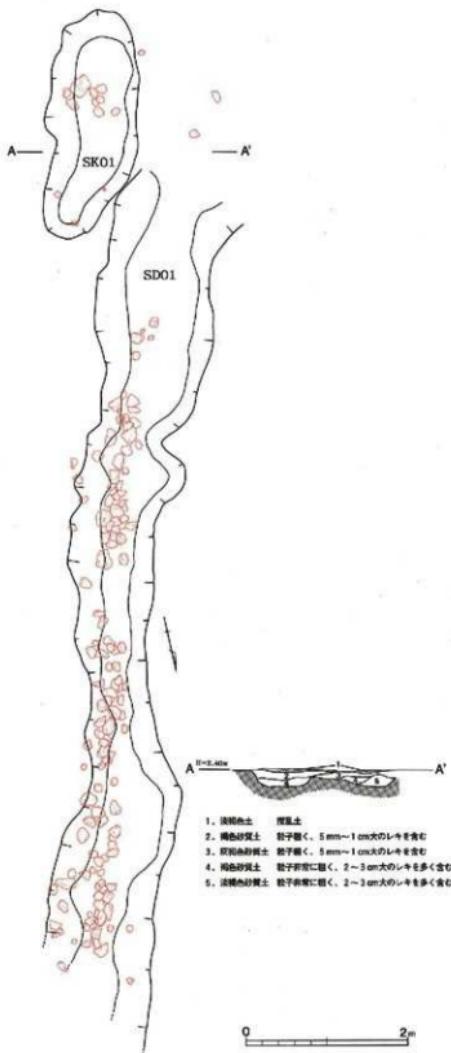
調査区の西寄り、A1Grから3Grにかけての黄褐色砂質土上面で検出した北北東-南南西に基軸をもつ溝状遺構である。南北ともに調査区外へとさらに伸びており、上部は削平により大部分を失っているものと考えられる。

検出した状況では、検出長15.0m以上、最大幅1.50mを測り、検出高は標高約2.40mである。

覆土には、上層から灰褐色砂質土、褐色砂質土、淡褐色砂質土と堆積しており、下層になるほど粒子が粗く、2~3cm大のレキを多く含んでいる。断面の形状は、上部の削平が大きいために一概には言えないが、底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約20cmを測る。また、底面における標高は南側で2.25mであるのに対し、北側では2.15mと10cm程度低くなっている。北へ向かって緩やかに傾斜している。

遺物には、弥生時代中期から後期のものと考えられる甕の底部が1点のみ出土している。また、溝の底面直上からは、10~20cm大の割石が敷き詰められた状態で検出されている。

遺構の性格は判断しがたいが、底面に敷き詰められた石は、何らかの機能をもつものと考えられる。用水路として機能していたとすれば、底面における傾斜から南南西方向から取水し、石は底面を崩れにくくするために敷き詰めたものと考えられ、時期的にも弥生時代中期から後期にかけて築かれた可



第99図 SD01実測図

能性がある。

なお、南側ではSD01と並列するように北北東-南西に基軸をもつSK01があり、この底面においても人頭大の石が検出されている。築かれた時期や機能的にも関連をもつ遺構であると推測される。

#### B2Gr SK01 (第100図)

B2Grの黄褐色砂質土上面で検出した土壤状遺構である。底部が部分的に残存したものと考えられ、東側は検出できない状況であった。現状では長軸95cm以上、最大幅60cmを測り、東西に長いややいびつな椭円形状を呈している。なお、検出高は標高2.30mである。

覆土には、上層に粒子のやや粗い淡褐色土、下層に粒子の粗い暗灰色土が堆積している。断面の形状は、上部の大部分が失われているために判断できないが、現状では底面はほぼ平坦に作り出して、深さは約3cmと浅いものである。

遺物は出土しておらず、築かれた時期や遺構の性格は判断できないが、覆土にはしまりがない土が堆積しており、VI区で検出された近世の遺構によく似ている。

#### A1Gr P01 (第101図)

A1Grの黄褐色砂質土上面で検出したピット状遺構である。上部は大部分が失われているものと考えられるが、現状では長軸長37cm、最大幅18cmを測り、東西にやや長い長方形状を呈している。なお、検出高は標高2.30mである。

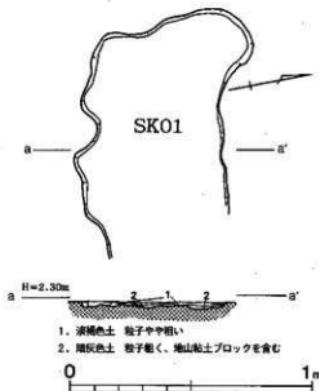
覆土には、粒子のやや粗い褐色土や淡褐色土が堆積している。断面の形状は上面が大きく削平されているため判断できないが、底面はほぼ平坦に作り出し、現状での深さは約2cmである。

遺物は出土しておらず、築かれた時期や機能については不明である。なお、A1Grで検出された他のピット状遺構もほぼ同様の覆土をもつものである。

#### V区の出土遺物 (第102図)

1は、SD01内から出土した弥生土器壺の底部である。底部から胴部にかけて外反しながら立ち上がり、外面は縱方向のミガキトナデ、内面はナデによる調整が行われている。このような特徴をもつ壺は、弥生時代中期から後期にかけて多く認められるものである。

2は、弥生土器の壺である。頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は上下に拡張して2条の凹線文を巡らせ



第100図 B2Gr SK01実測図

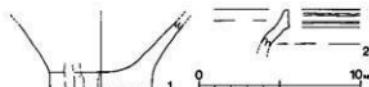


第101図 A1Gr P01実測図

ている。内外面ともにナデによる調整が行われ、外面にはススが付着している。このような特徴をもつ壺は、松本編年IV-2様式からV-1様式に相当する資料と考えられる。

以上のように、V区からは2点のみの遺物しか検出していないが、そのいずれもが弥生時代中期

から後期にかけての資料と考えられるものである。井原遺跡の西側では当該期の遺物が検出される傾向にあることから、調査区のさらに西方には住居跡など遺跡としての中心があったものと推測される。



第102図 出土遺物実測図

#### V区 出土遺物観察表（土器）

探査番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
102-1	B3Gr SD01	弥生土器 壺or壺	—	6.2	—	外／ミガキ 内／ナデ 底／ナデ	淡褐色	滑 石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-2	表探	弥生土器 壺	—	—	—	外／2条の凹線文に入る、ナデ 内／ナデ	褐色	滑 石英・雲母を含む	良好	外面スス付着

#### 註

(1)『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』正岡勝夫・松本岩雄 木耳社 1992年



## **VII. VI区の調査**

## VII. VI区の調査

### 1. 発掘調査の概要

調査地は、新内藤川河川拡幅によって新たに道路を敷設する部分で、近年まで畠地として利用されていた。試掘調査の結果から、遺物包含層までの耕作土を重機によって取り除き、排土した。そして、東西、南北ともに7m間隔のグリッドを設定し、西側からA～D、南側から1～6Grとした。調査面積は、東西約7m×南北約65mの約455m<sup>2</sup>である。なお、V区から続く南側では採土によって50cm程度上部が削平されている状態であった。

#### 層序（第105図）

調査区が長いために堆積土は一定ではないが、耕作土を除くと基盤層である黄褐色砂質土までの層厚は、約20cm程度である。

基本的な層序は、上層には粒子がやや粗くしまりのある灰褐色土、下層には5mm～1cm大のレキを含む灰褐色砂質土や淡灰褐色砂質土が堆積し、黄褐色砂質土へと達している。この黄褐色砂質土は、I区西側での遺構面となっているが、VI区でも同様であり、北側に向かって広く堆積するものである。なお、基盤層における標高は2.70mとほぼ一定である。

#### 遺構（第103図・第104図）

遺構は、溝状遺構6、土壤状遺構7、落ち込み状遺構3のほか、ピット状遺構を多数検出している。遺構が築かれた時期は、弥生時代後期、古墳時代初頭、古墳時代中期、近世のものなど様々であり、これららの遺構が複雑な切合関係をもって密に配置されている。

近世の遺構は、3Gr以北で確認されており、ピットや溝、土壤状遺構などを検出しているが、出土遺物も少ないうえ細片で、時期的判断が難しいものが多い。なかには、豚の死骸を埋めた土壤などもある。古墳時代中期頃の遺構は少ないが、土壤墓と考えられているB4Gr SK03やSX02などがあり、当該期の遺物が出土している。古墳時代初頭頃の遺構は、CSGrで溝状遺構3のほか、南側でも落ち込み状遺構内から当該期の遺物が出土している。

弥生時代後期の溝状遺構は、調査区の北側で検出されている。的場式の遺物を伴うものあり、井原遺跡での弥生時代の遺構としては唯一確実なものである。

#### 遺物

出土遺物は、遺構の検出数に比べると極端に少ない。その中にあってB4Gr SK03からはセット関係をもつ完形の蓋坏が出土しており、D6Gr SD01からは的場式の特徴をもつ甕片が出土している。また、遺構に伴うものではないが、弥生時代中期から後期頃と考えられる土器片も数点検出されている。

## 2. 遺構と遺物

### (1) 近世以降の遺構

近世以降の遺構は、VI区の上層に広く堆積している灰褐色土上面において検出され、溝状遺構1、土壤状遺構4のはか落ち込み状遺構やピット状遺構を多数検出している。

C5Gr SK02 (第106図)

C5Grの灰褐色砂質土上面で検出した土壤状遺構である。平面プランは、長軸長1.35m、最大幅77cmを測り、東西方向に基軸をもつややいびつな橢円形状を呈している。なお、検出高は標高2.80mである。

覆土には、上層にしまりのない灰褐色土、中層に暗褐色土、下層には灰褐色砂質土が堆積している。断面の形状は、肩部からやや鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは35cmを測る。

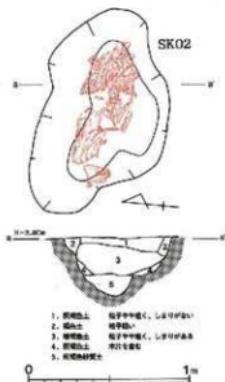
この土壤状遺構の中層から下層にかけては、ほぼ一頭分の豚の骨が検出されている。また、付近からは大きさはそれぞれ異なるものの、同様な埋め方をしたピット状遺構が7検出されている。以上のことから考えると、豚の死骸を埋葬したものので、明治以降に築かれたものであろう。

B4Gr SK01 (第107図)

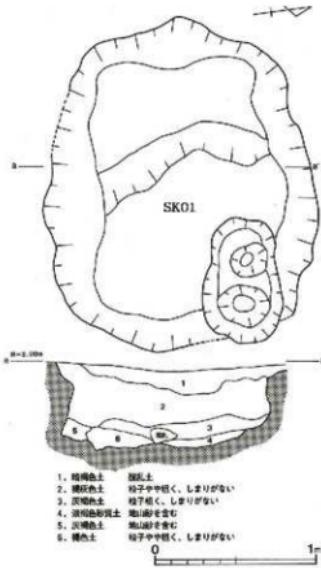
B4～C4Grの灰褐色土上面で検出した土壤状遺構である。平面プランは、長軸長2.05m、最大幅1.72mを測り、東西にやや長い橢円形状を呈している。なお、検出高は標高2.90mである。

覆土には、上層に褐色土、下層には灰褐色土や褐色土が堆積しているが、総じて粒子が粗く、しまりのないものである。断面の形状は、肩部から鋭角に落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。西側の底面は一段低く作り出されて、最深部までの深さは56cmを測る。また、切合関係からC4Gr SD01よりも新しい時期の遺構であることが明らかである。

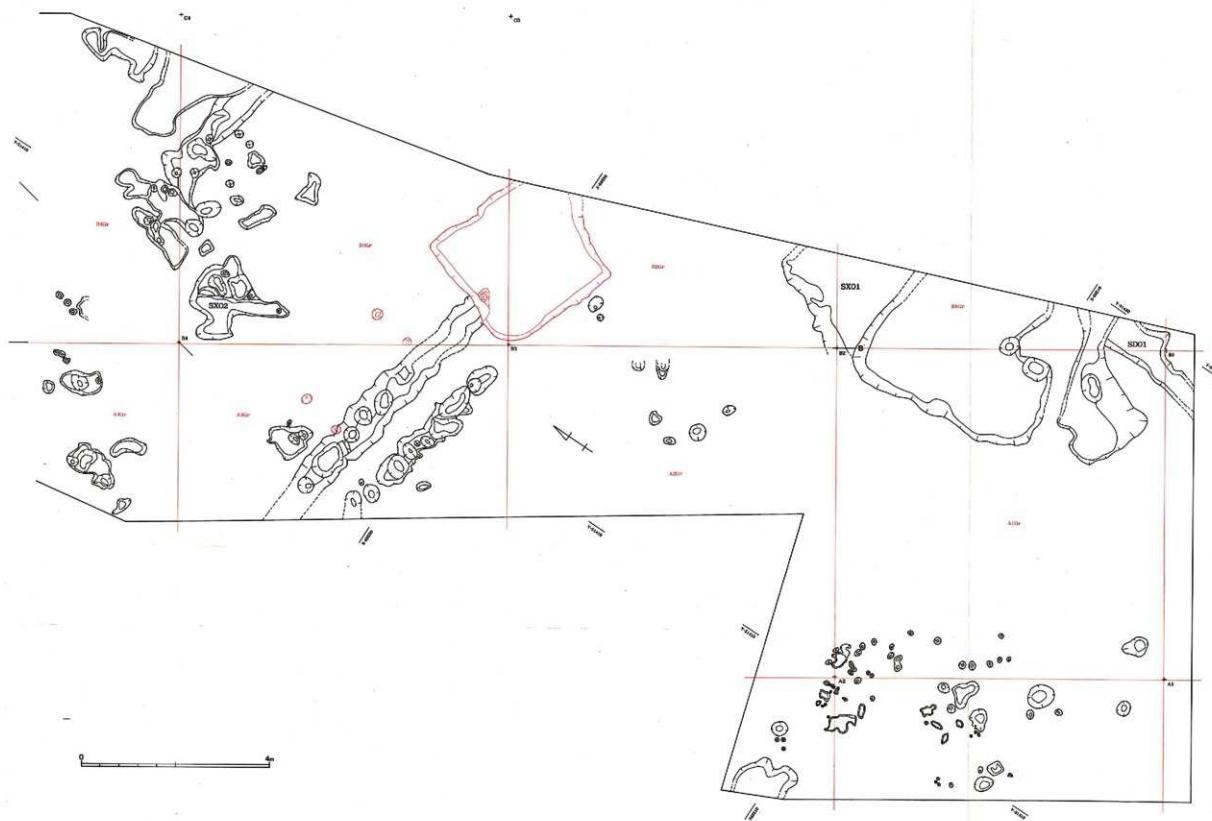
出土遺物には、磁器小片が1点出土しているにすぎず、遺構が築かれた時期や機能については不明である。しかしながら、灰褐色土上面での検出状況を考えると、近世



第106図 C5Gr SK02実測図

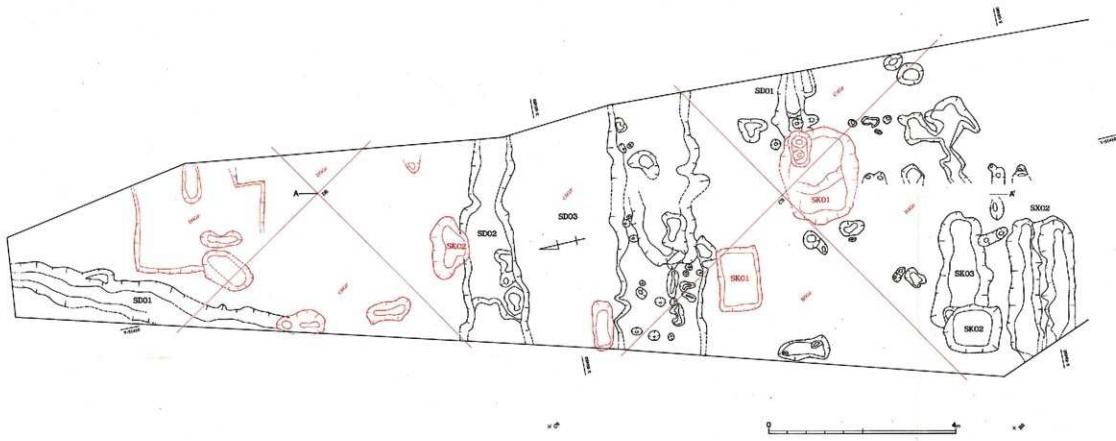


第107図 B4Gr SK01実測図



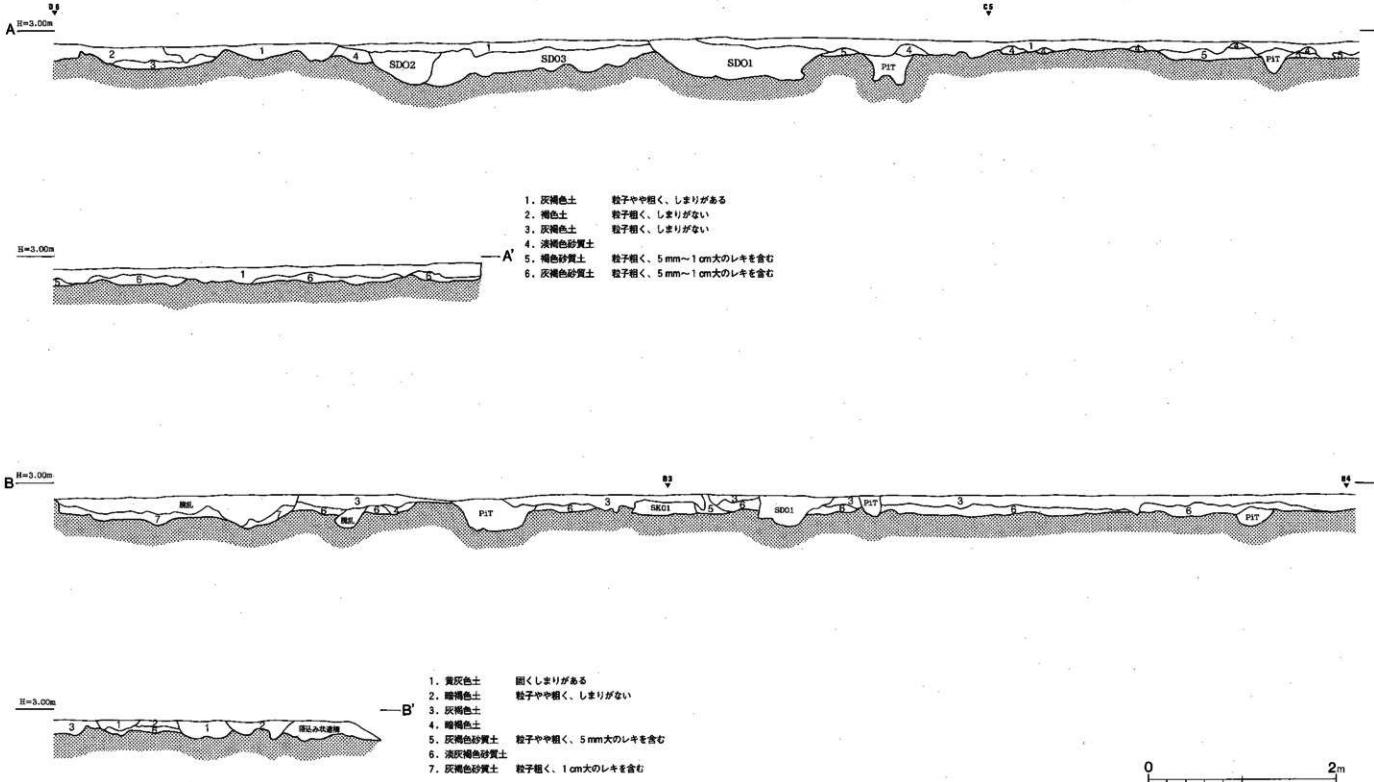
第103図 VI区遺構配置図（南側）

※赤刷は近世の遺構



第104図 VI区遺構配置図（北側）

※赤刷は近世の遺構



第105図 VI区堆積土層図

以降に築かれたものであろう。

## (2) 古墳時代中期墳の遺構

当該期の遺構として確実なものには、土壙状遺構1、落ち込み状遺構1があり、いずれも土壙墓としての可能性をもつものである。

### B4Gr SK02 (第108図)

B4Grの淡灰褐色砂質土上面で検出した土壙状遺構である。平面プランは、長軸長1.23m、最大幅1.04mを測り、南北方向に基軸をもつ長方形状を呈している。なお、検出高は標高2.80mである。

覆土には、上層に5mm大のレキを含む灰褐色土、下層にはしまりのない褐色土が堆積している。断面の形状は、東側で鋭角に、西側では約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出している。

遺物は出土しておらず、遺構が築かれた時期や機能については不明であるが、切合関係よりB4Gr SK03よりも新しい遺構であることが明らかである。

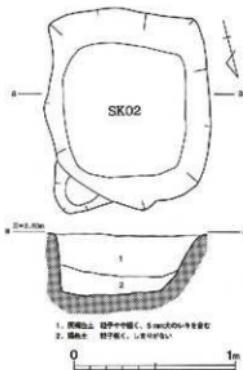
### B4Gr SK03 (第109図)

B4Grの黄褐色砂質土上面で検出した土壙状遺構である。西側は前述したSK02によって切られているが、長軸長2.48m、最大幅1.20mを測り、東西方向に基軸をもつてやや西側が張出した梢円形状を呈している。

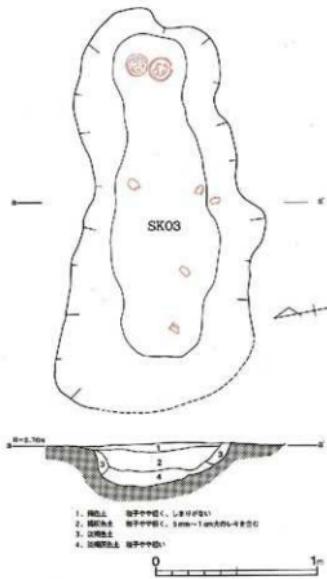
覆土には、上層にしまりのない褐色土、中層には5mm～1cm大のレキを多く含む褐灰色土、下層には粒子の粗い淡褐色土が堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは28cmを測る。

出土遺物には、土師器小片や完形の須恵器蓋坏が出土している。いずれも古墳時代中期墳の特徴を示しており、遺構が築かれたのも当該期であろう。なお、完形の須恵器は遺構の東側に置かれ、坏身は口縁部を上方に、坏蓋は下方に向けた状態で出土している。

遺構の性格としては、規模や形状から土壙墓が考えられる。おそらく東側に頭部を置いて埋葬したものと考え



第108図 B4Gr SK02実測図



第109図 B4Gr SK03実測図

られ、須恵器蓋は頭部の上方に置かれたものであろう。

#### SK03の出土遺物（第110図）

1は、須恵器蓋である。口径13.0cm、器高4.4cmを測る。口縁部と天井部の境には稜をもち、その下方には沈線が入っている。口縁端部は丸くおさめ、内側の5mm上位には沈線が入る。天井部上位は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデによる調整が行われている。

2は、須恵器身である。完形品で口径11.8cm、器高4.1cmを測る。口縁部からやや内傾して立ち上がる口唇部を有し、端部は丸くおさめている。底部下位は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデによる調整が行われている。

以上のような特徴をもつ蓋は、山本編年II期に相当する資料と考えられ、古墳時代中期頃のものと考えられる。また、土壙墓の頭部付近に置かれていたことから、土器枕としての機能をもつ可能性がある。

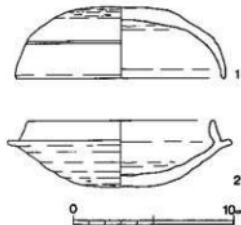
#### B4Gr SX02（第111図）

B4Grの淡灰褐色砂質土上面で検出した落ち込み状遺構である。西側は調査区外へと達しているが、現状では長輪長2.90m以上、最大幅1.30mを測り、東西方向に基軸をもっている。なお、検出高は標高2.80mである。

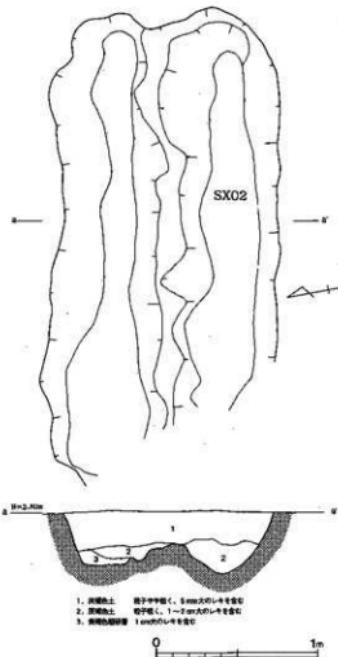
覆土には、上層に5mm大のレキを含む灰褐色土が約20cmの層厚で堆積し、下層には1~2cm大のレキを含む灰褐色土、北側では最下層に黄褐色粗砂層が人為的に敷き詰められていた。また、1層の下面では中央に段を作り出し、北と南に溝状に分岐している。最深部までの深さは、北側では34cm、南側で40cmを測り、北側は底部を平坦に南側では丸く作り出している。

遺構には細片が多いが、古墳時代中期頃のものが少量ながら検出されている。検出面の関係から、前述したSK03よりも新しい時期の遺構であることが明らかであるが、さほど時期差を生じないものと推測される。

遺構の性格は判断しがたいが、基軸の方向や形状などがSK03とよく似ており、土壙墓の可能性をも



第110図 SK03出土遺物実測図



第111図 B4Gr SX02実測図

つものである。

### (3) 古墳時代初頭頃の遺構

当該期の遺構として確実なものには、溝状遺構4、落ち込み状遺構4がある。また、遺物を伴わなものが多いが、黄褐色砂質土上面で検出したピット状遺構の多くは当該期のものである可能性が高い。

#### C5Gr SD01 (第112図)

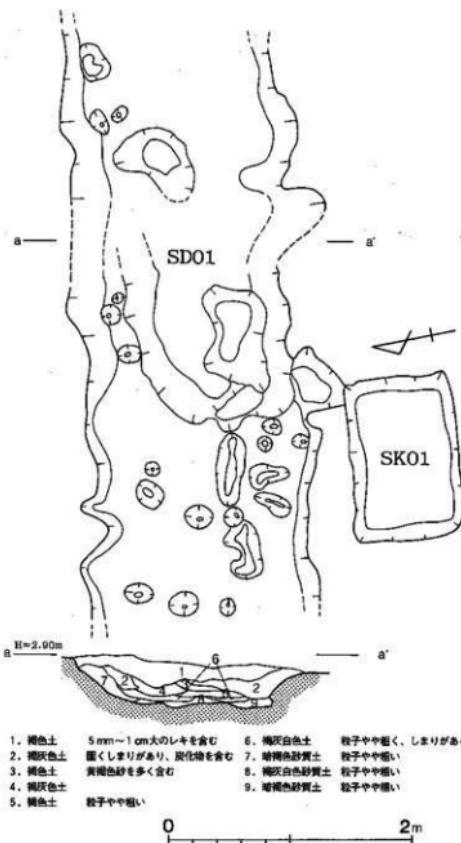
調査区の北側、C5Grの黄褐色砂質土上面で検出した東西方向に基軸をもつ溝状遺構である。東側と西側はともに調査区外へと達しているが、検出長5.20m以上、最大幅1.76mを測る。

なお、検出高は標高2.90mで、北側に向かって地山である黄褐色砂質土が微高地状に上昇していることが注意される。

覆土には、上層に5mm～1cm大のレキを含む褐色土が広く堆積し、中層には炭化物を含む灰褐色土や褐灰色土、下層には粒子のやや粗い暗褐色砂質土・褐灰白色砂質土などが堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面はやや丸く作り出している。また、底面には径20cm程度のピットが10余り掘り込まれ、東側では一段低くなっている。最深部までの深さは50cmを測る。

遺物には、古墳時代初頭頃と考えられる複合口縁をもつ甕が数点出土していることから、当該期に築かれた遺構であろう。

遺跡の性格は判断しがたいが、遺構面が砂地であるとともに覆土にも砂質土が堆積していることを考えると、水が流れていいた状態と



第112図 C5Gr SD01実測図

は考えにくく、空濠のような状況であったと推測される。

#### C5Gr SD02 (第113図)

C5Grの黄褐色砂質土上面で検出したほぼ東西方向に基軸をもつ溝状遺構である。東側と西側はともに調査区外へと達し、さらに伸びるものと推測される。現状では、検出長4.0m以上、最大幅1.50mを測るが、溝幅が東に向かってだいに狭くなり、調査区の東端では80cm程度となっている。

覆土には、上層に炭化物を含む灰褐色土、下層には粒子のやや粗い暗褐色砂質土が堆積している。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出している。また、西側では一段低くなっている、最深部までの深さは40cmを測る。

遺物には、複合口縁をもつ古墳時代初頭頃の甕が出土していることから、遺構が築かれたのも当該期であろう。

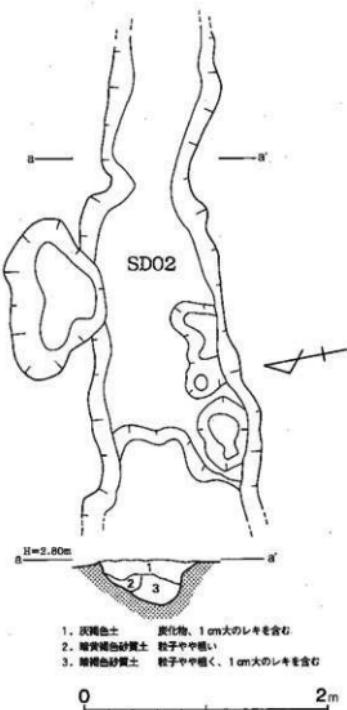
遺構の性格は、前述したC5Gr SD01と基軸や築かれた時期がほぼ同じであることから、関連したものと推測される。そして、覆土などの状況から考えると水の流れがあったとは考えにくく、空濠のような状況であったと思われる。なお、並列したSD01とSD02の下面には、切合関係よりこれらの溝よりも古い時期のSD03が築かれていたことが明らかである。SD01とSD02によって切られているため、肩部は明らかではないが、掘り直しが行われた可能性がある。

#### B2Gr SX01 (第114図)

B2Grの灰褐色砂質土上面で検出した落ち込み状遺構である。南側は採土による削平のために失われているが、北側は調査区外へとさらに伸びている。検出した状況では、幅1.70m以上を測るものと考えられ、検出高は標高2.70mである。

覆土には、上層に粒子のやや粗い暗褐色土、中層には褐色砂質土、下層には粒子の粗い淡褐色砂質土が堆積している。断面の形状は、肩部から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出し、最深部までの深さは約25cmを測る。

遺物には、古墳時代初頭頃と考えられる複合口縁をもつ甕片が出土していることから、当該期に築かれたものであろう。また、現状から推測すると南南西—北北東に基軸をもつ溝状を呈するものと考えられる。



第113図 C5Gr SD02 実測図

遺構の性格は判断しがたいが、基軸の方向や遺構の時期などから、I区で検出されたSD10・SX10とつながる可能性がある。

#### B3Gr SX02 (第115図)

B3Grの黄褐色砂質土上面で検出した落ち込み状遺構である。平面プランは、南側に細長く張出したいびつな形状を呈しており、検出高は標高2.70mである。

覆土には、上層に粒子が粗い褐色土が広く堆積し、下層には淡褐色土・淡褐色砂層が堆積している。断面の形状は、東側では肩部から約45度の角度で落ちて底面は平坦に作り出しているが、底面にはさらにピット状のものが掘りこまれている。西側ではさらに一段深く掘り込んで底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは18cmを測る。

遺物には、古墳時代初頭頃と考えられる複合口縁をもつ壺片が出上していることから、当該期に築かれたものであろう。

遺構の性格は判断しがたいが、形状が不整形で南側に細長い張出し部をもっており、特異な様相を示す遺構である。

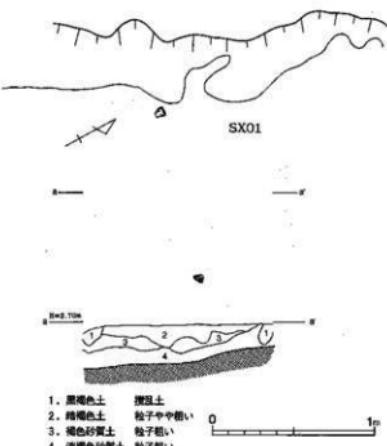
この他にも黄褐色砂質土上面で検出した遺構の中には、古墳時代初頭に築かれたと考えられるピットや落ち込み状遺構が存在するが、出土遺物が少ないうえ、細片で時期的判断に堪えない。

#### (3) 弥生時代後期の遺構

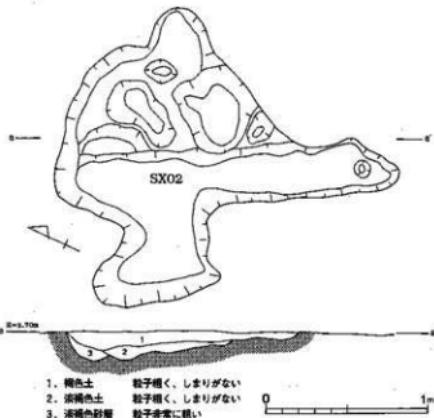
当該期の遺構は、調査区の北端で検出したD6Gr SD01のみである。調査全体を通して唯一確実な当該期の遺構で、貴重な資料となっている。

#### D6Gr SD01 (第116図)

D6Grの黄褐色砂質土上面で検出した南北-北東方向に基軸をもつ溝状遺構である。南北ともに調査区外へと達しているが、検出長6.0m以上、最大幅92cm、狭いところでも54cmを測る。なお、検出高は標高2.70mである。



第114図 B2Gr SX01実測図



第115図 B3Gr SX02実測図

覆土には、上層に褐色粗砂層、中層には粒子のやや粗い褐色土・淡褐色土、下層には褐色粗砂層が堆積している。断面の形状は、東側からはやや緩やかに、西側では約45度の角度で落ちて底面は丸く作り出しており、最深部までの深さは45cmを測る。また、底面におけるレベルは北側で2.10mであるのに対し、南側では2.00mと10cm程度低くなっている。北に向かって傾斜していることが注意される。

出土遺物には、底面直上から弥生土器の壺と器台が出されている。壺は複合口縁の上部に凹線文を施すもので、的場式と呼称されるものである。このことから、遺構が築かれたのは、弥生時代後期頃と考えられる。井原遺跡からは、弥生時代中期から後期にかけての遺物が数点検出されて入るが、遺構に伴うものはこのSD01のみである。

遺構の性格は判断しがたいが、遺構面は砂地であり、覆土には砂質土が堆積していることから、水の流れがあったとは考えにくく、空塗のような状態であったと考えられる。

#### SD01の出土遺物（第117図）

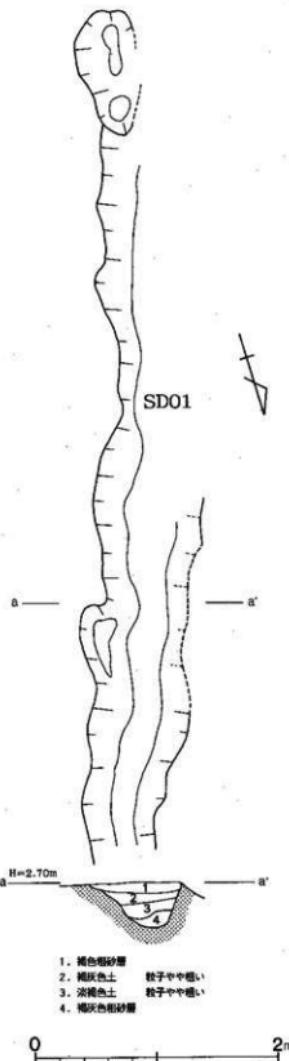
1は、複合口縁をもつ壺である。複合口縁の稜は、水平方向に向くがやや鋸歯を欠いている。稜の上位にはクシ状工具によって密な凹線文が施され、口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。

2は、器台の受部であろう。端部は外方に折り曲げ、丸くおさめている。外面にはクシ状工具による凹線文が密に施され、内面は横方向のミガキによる調整が行われている。

以上のような特徴をもつ遺物は、松本編半V-3様式に相当する資料と考えられ、的場式と呼称されるものである。

#### 遺構外の出土遺物（第118図）

1・2は弥生土器の壺である。1は、頸部から口縁部にかけて強く屈折し、口縁端部は丸くおさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。2は、頸部



第116図 D6Gr SD01実測図

から口縁部にかけて「く」の字状に屈折し、口縁端部は上下に拡張して平坦面を作り出している。内外面ともにナデによる調整が行われている。

1は、松本編年Ⅲ-1~2様式、2はⅢ-2~IV-1様式頃に相当する資料であろう。

3は、複合口縁をもつ壺である。複合口縁の

稜はやや下方を向いて突出し、口縁端部は外方に折り曲げて丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ、頸部下外面は縦方向のハケと波状文が施され、内面はケズリによる調整が行われている。

4・5は、複合口縁の稜はやや下方を向いて突出し、口縁端部を外方に折り曲げて丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデによる調整が行われている。以上のような特徴をもつ壺は、草田<sup>(3)</sup>5期に相当する資料と考えられ、弥生時代終末期のものであろう。

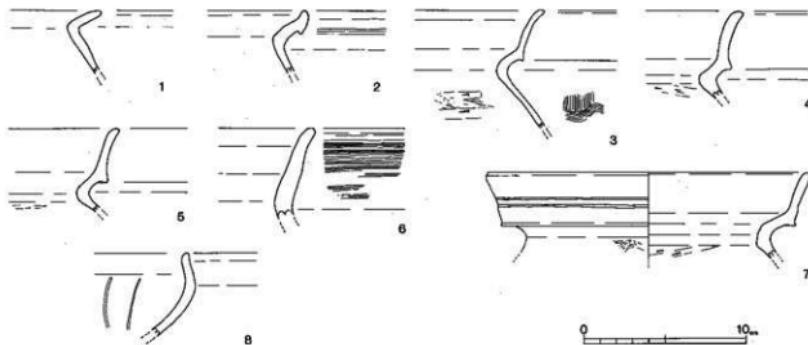
6は、土師器壺であろう。口縁部中位にわずかな膨らみをもち、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面ともにナデによる調整が行われている。古墳時代中期頃の遺物であろう。

7は、複合口縁をもつ壺である。複合口縁の稜はやや下方を向いて突出し、口縁端部は丸くおさめている。頸部下外面には波状文が施され、内面はケズリによる調整が行われている。草田6期に相当する資料であろう。

8は、土師器高杯である。内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさめている。内外面ともに赤色塗彩され、内面には放射状の暗文が施されている。古墳時代中期頃の遺物であろう。



第117図 SD01出土遺物実測図



第118図 遺構外出土遺物実測図

## VII区 出土遺物観察表（土器）

標団番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
110-1	B4Gr SK03	須恵器 壺蓋	13.0	-	4.4	外／上半部回転ケズリ 下半部回転ナデ 内／回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	完形 110-2とセット
-2	B4Gr SK03	須恵器 壺身	11.8	-	4.1	外／上半部回転ナデ 下半部回転ケズリ 内／回転ナデ	暗灰色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母・金雲母を含む	良好	完形 110-1とセット
117-1	D6Gr SD01	弥生土器 壺	-	-	-	外／ナデ、巴線文 内／ナデ	外／褐色 内／暗褐色	密 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	良好	外面スス付着
-2	D6Gr SD01	弥生土器 器台	-	-	-	外／凹線文 内／ミガキ	褐褐色	普通 石英・雲母を含む	良好	受部破片
118-1	A4Gr 東側溝 壺	-	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／肩力向ハケ、波状文 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
-2	B3Gr 浜床褐色 砂質土	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／不明 内／ケズリ	黃褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面口縁部に2条の凹線が入る
-3	A4Gr 暗褐色 砂質土	弥生土器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／ナデ 内／ナデ	黃褐色	密 1mm大の砂粒・石英・雲母・金雲母を含む	良好	
-4	A1Gr SX01	古式 土器器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／不明 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
-5	A1Gr SX01	古式 土器器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／不明 内／ケズリ	外／褐色 内／暗褐色	やや粗い 石英・雲母・金雲母を含む	普通	外面スス付着
-6	A2Gr 灰褐色 土	土器器 壺	-	-	-	口縁部内外面ナデ	褐色	普通 石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面にスス付着
-7	C5Gr 褐色砂 質土	古式 土器器 壺	19.8	-	-	口縁部内外面ナデ 頸部下 外／一部に波状文 内／ケズリ	淡褐色	密 石英・雲母・金雲母を含む	良好	外面スス付着
-8	B4Gr 浜床褐色 砂質土	土器器 壺	-	-	-	外／ナデ 内／ナデ、ミガキ、暗文が入る	内外面／ 赤褐色 瓶／褐色	やや粗い 1mm以下の白色砂粒 ・石英・雲母を含む	普通	内外面とも赤色並彩

### 註

- (1)『島根大学開学十周年記念論集』「山陰の須恵器」 山本清 1960年
- (2)『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』 正岡勝夫・松本岩雄編 木耳社 1992年
- (3)『南讃武草田遺跡』 鹿島町教育委員会 1992年

## **IX. 総括**

## IX. 総括

### 1. 地理的環境

『出雲國風土記』によれば、井原遺跡が形成された頃は次のような景観であったようである。現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川は、当時は西流して入海のような状況を呈していた潟湖（現在の神西湖）に注いでいたようである。そして、斐伊川が西流していた当時は、神門水海の北方に注ぎ、南からは神戸川も注いでこの付近は湿地帯となっていたことが知られている。

このような地形のもと、井原遺跡は入海の河口部にはほど近く、北に斐伊川、南に神戸川を臨む旧自然堤防上に立地していたと考えられる。

井原遺跡では、弥生時代後期から近世に至るまでの遺構が多数検出されているが、遺構の配置には地形的な要因により特徴がある。現状では一段高い西側が畠地、東側が水田として利用されているが、これは、堆積土の状況から考えると旧地形を踏襲しているものと考えられる。

I区9Gr付近で確認されているように、井原遺跡では南西-北東方向に基軸をもって基盤層の上昇が認められる。基盤層の低い東側では、古墳時代中期頃の遺構が密に配置され、当該期以外の遺構は皆無である。遺跡の東方には湿地帯が広がっていたと考えられており、この湿地帯が比較的安定した古墳時代中期頃には標高の低い地域に水田や井戸が築かれ、生活の場として利用されていたものと考えられる。

一方、基盤層が高い西側では、一時空白期間は認められるものの弥生時代後期から近世に至るまでの遺構が築かれている。この地域は、水害などの影響を受けにくい安定した地域であったであろう。

### 2. 遺構

#### （1）弥生時代後期の遺構

弥生時代後期頃に築かれた遺構で確実なものは、VI区D6Grで検出したSD01のみである。南西-北東方向に基軸をもつ溝状遺構で、底面直上からの壺や器台が出土している。

井原遺跡では、標高の高い西方で弥生時代中期から後期にかけての遺物が数点検出されているが、遺構に伴うものは少ない。このことから、調査区のさらに西方に当該期の遺跡としての中心があったものと考えられる。

#### （2）弥生時代終末期から古墳時代初頭頃の遺構

溝状遺構、落ち込み状遺構、土壙状遺構、ピット状遺構など、多くの遺構を検出している。

I区で検出したSD10は、南西-北東方向に基軸をもつ大規模なもので、多量の遺物が出土している。そのほとんどが草田6期<sup>(1)</sup>の資料と考えられるもので、中には在地的な特徴をもつものも認められている。また、北側で検出されたSX10はSD10と同一の溝と考えられている。このような大規模な溝は、天神遺跡<sup>(2)</sup>や古志本郷遺跡<sup>(3)</sup>、下古志遺跡<sup>(4)</sup>などからも検出されており、集落を囲繞する環濠として機能していた可能性もある。

ピット状遺構は、I区の10~15Grにかけて多数検出されており、そのほとんどが東西方向に基軸を向いている。長軸1~1.5m程度を測るものが多く、付近には「死場」という小字名が残っていること

から、土壙墓の可能性をもつものである。

その他、I区SX12でも当該期の遺物が出土しているが、草田7期頃の特徴を示しており、SD10よりも後出するものであろう。

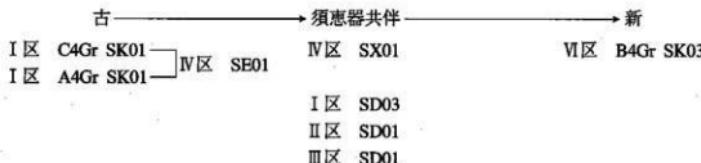
III区では、西側で3列のピット列が検出されている。1.6m、1.2mの間隔で一直線上に配置され、草田6期頃の遺物が出土している。ピット列周辺に多数存在する小ピットからは、プラントオパールが検出され稻作が行われていたと考えられることから、これらピット列は水田を区画するための柱列や柵列などとして機能していたものと考えられる。

VI区では、C6Grで3条の溝が検出されている。いずれも東西方向に基軸をもつもので、草田6期頃の遺物が出土している。基盤層が砂地で覆土にも砂質土が堆積していることから、空豪のような状況であったと考えられるものである。

### (3) 古墳時代中期の遺構

当該期の遺構は、調査全体を通して最も多く検出しておらず、遺物の出土量も多い。当該期の遺跡は、市内では南部丘陵に所在する三田谷I遺跡が知られていましたが、近年の発掘調査によつて、平野部でも中野美保遺跡や中野西遺跡から古墳時代中期の遺構や遺物が検出されている。

井原遺跡では、溝状遺構や土壙状遺構、ピット状遺構などを検出しているが、主な遺構の相互関係を整理して示すと次のようになる。



井戸として機能していたと考えられる遺構はI区とIV区で検出されている。このうちI区C4Gr SK01からは土師器甕とともに小型丸底壺や台付鉢が出土しており、貴重な資料となっている。IV区では井戸枠をもつものが検出され、最下層から古墳時代中期頃の土師器が出土している。いずれも井戸を廃棄する際に土器を投入して祭祀を行ったものと考えられ、穿孔または上部を切り取った遺物も出土している。

溝状遺構では、I区のSD03とII区SD01が同一の溝であることが明らかとなっている。南北方向に基軸をもち、60m以上の長さを測る。この溝からは土師器と須恵器が共伴して出土しており、特にII区からは移動式窓が多く出土していることが注意される。西側には水田が存在していることから、灌漑用水路などとして機能していたものと考えられる。その他、III区からは須恵器を共伴するSD01が検出されている。

IV区で検出したSX01は、切合関係からSE01よりも新しい遺構であることが明らかである。付近からは山本縄年I期の蓋坏が出土しており、井原遺跡ではこの時期から須恵器を共伴するものと考えられる。

土壙墓と考えられる遺構はVI区で検出されている。B4Gr SK03は東西方向に基軸をもつもので、遺

構の東側には須恵器蓋坏が置かれていた。山本編年Ⅱ期に相当する資料と考えられ、土器枕としての機能をもっていた可能性もある。

#### (4) 中世の遺構

中世の遺構は、I区でピット状遺構や土壌状遺構が検出されているが、出土遺物も少なく、部分的なものである。遺物には、15世紀後半から16世紀にかけての白磁や青磁が出土しており、当該期にもわずかながら生活の跡を窺うことができる。

また、井原遺跡では古墳時代後期から15世紀にかけての遺構や遺物は皆無であり、この時期には人々の生活の場としては利用されなかったようである。

#### (5) 近世の遺構

近世の遺構は、I区・VI区で検出している。I区では土壌墓と考えられるものが3基検出されている。いずれも南北方向に基軸をもち、土師器皿が供献されるものである。このうち、A9Gr SK01は土師器皿とともに7枚の古銭が副葬されている。また、B9Gr SK01からは「さ」と書かれた墨書き器が出土し、床面には井桁状に組まれた木棺の痕跡が残っていた。

VI区でも土壌や溝を検出しているが、遺物も細片で時期や遺構の性格については不明なものが多い。中には、豚の死骸を埋葬した遺構なども検出されている。

### 3. 遺 物

#### (1) 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、調査区の西側で数点検出されており、II・III・IV区では検出されていない。このうち、遺構に伴うものにはVI区D6Gr SD01から出土した的場式の特徴をもつ壺と器台の小片がある。いずれも外面にクシ状工具による凹線文が施されている。その他、SD10からは草田4~5期に相当する資料が検出されているが、直接遺構に伴うものとは考えにくい。

また、遺構外からは、V区・VI区で当該期の遺物が検出されている。このうち、第118図-2のように口縁端部を上下に拡張させて平坦面を作り出す松本編年Ⅲ様式に相当する資料も検出されており、弥生時代中期から遺跡が形成され始めたことが窺える。

#### (2) 弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺物

当該期の遺物には、壺・壺・鉢・高坏・器台・低脚坏などが出土しており、バラエティーに富んでいる。草田6期に相当する資料が最も多く、その中には在地的な特徴をもつものもある。

器台には、第47図-31のように筒部の器壁が非常に厚く、外面筒部にハケ調整を行うものがSD10やSX10・SX12から検出されている。またSX10から出土した低脚坏は器壁がやや厚く、やや深めの底部をもっており、天神遺跡でも指摘されているように在地的な製作技法の違いと考えられる。その他、I区SX12からは口縁端部を平坦におさめる草田7期に相当する資料も検出されている。

また、市内に所在する当該期の遺物を出土する遺跡には、総じて畿内系の遺物が認められるが、井原遺跡においてはほとんど撒入土器が認められていない。入海の河口部にほど近い地理的条件は、他地域との交流を考えるうえでは要衝の地を占めるものであるが、出土遺物から判断すると、非常に在地色の強いものとなっていることが一つの特徴といえる。

### (3) 古墳時代中期の遺物

当該期の遺物には、土師器壺・壺・高坏・塊、須恵器坏身・坏蓋・高坏のほか、移動式壺や土鍬・石器などが出土している。

土師器壺には、I 区 C4Gr SK01 から出土した壺のように口縁部にわずかに膨らみをもつものがある。この時期には小型丸底壺や台付鉢が認められ、須恵器は共伴していない。その後、I 区 SD03 などから出土した壺のように口縁部に複合口縁のような稜をなすものが出現し、この時期には山本編年 I 期の須恵器を共伴するものと考えられる。当該期における土師器の編年は、資料も乏しくよく把握されていない現状であるが、井原遺跡の資料はその細分化に貴重な資料となりうるものである。

また、II 区 SD01 から多量に出土した移動式壺は、出雲地方での使用時期としては最も早い段階もので、5 世紀後半から 6 世紀初頭のものと考えられる。その他、石器が 2 点出土しているが、いずれも砥石として使用されたものである。

須恵器には、出雲地方の集落遺跡では稀少な山本編年 I 期～II 期の資料が多く出土しており、当地域で実用としての須恵器の初源となり、貴重な資料となっている。

### (4) 中世～近世の遺物

中世の遺物は少なく、15 世紀後半から 16 世紀にかけての白磁碗や皿、青磁碗が出土しているにすぎない。

近世の遺物は、I 区の土塙墓で土師器皿や小皿が出土し、中には「さ」と墨書きされたものもあり、埋葬された人物との関わりが指摘されている。また A9Gr SK01 からは開元通寶や皇宋通寶など古銭が 7 枚出土しており、当該期の墓制を考えるうえで貴重な資料となっている。

## 4. おわりに

今回の発掘調査では、出雲平野では稀少な古墳時代中期の遺構や遺物を多数検出し、当該期の人々の生活を知るうえで貴重な資料を得ることができた。しかしながら、調査範囲が極めて限定されていたこともあり、遺跡の性格を十分に把握することはできなかった。遺跡としては調査地の西方及び北方にさらに広がり、居住域など遺跡の中心が存在していたと考えられる。今後調査する機会があれば、遺跡の実態を明らかにし、郷土の財産として後世に伝えて行くことが望まれる。

## 註

- (1) 『南構武草田遺跡』 鹿島町教育委員会 1992 年
- (2) 『天神遺跡第 9 次発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1999 年
- (3) 『古志本郷遺跡 I』 島根県教育委員会 1999 年
- (4) 『下古志遺跡』 出雲市教育委員会 2001 年
- (5) 『島根大学十周年記念論集』「山陰の須恵器」 山本 清 1960 年
- (6) 『弥生土器の様式と編年』 山陰・山陽編 正岡勝美・松本岩雄編 木耳社 1992 年

## **X. 自然科学分析**

## X. 自然科学分析

### 1. 井原遺跡におけるプラント・オパール分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株）

#### はじめに

本報告は、出雲市芸術文化振興課文化財室が川崎地質株式会社に委託して実施した分析調査を渡辺がまとめおしたものである。

今回の分析では、遺跡内で検出された多数の小ピットの成因を調べる目的で、発掘調査に伴って露出した各地点より採取した試料を対象としてプラント・オパール分析を行った。

井原遺跡は島根県出雲市西部の白枝町地内に立地する遺跡である。

#### 分析試料について

分析試料は出雲市芸術文化振興課文化財室との協議の上、Ⅲ区において採取されている（第119図）。Ⅲ区西南部の平面図を第120図に示し、試料採取地点を記した。試料No.1-1、2、3は小ピット充填物であり、試料No.1-2は比較試料として地山より採取した。また、試料No.4-1はトレンチ壁面で採取した。図4のプラント・オパールダイアグラム右側に模式柱状図を示し、採取層準を示した。

#### 分析方法および分析結果

プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスピーズ法に従い行った。同定・計数にあたっては、イネ科に限定（タケ亜科も細分していない。）した。分析結果を第121・122図のプラント・オパールダイアグラムに示した。プラント・オパールダイアグラムでは、計数結果を1gあたりの検出数に換算し、帶で表している。

各分類群の検出傾向は以下の様である。

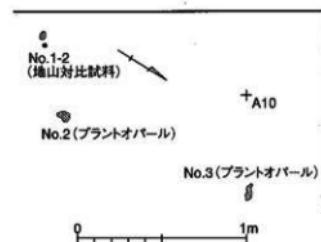
##### ①イネ

小ピットの試料のうち、試料No.1-1では6900個/gのイネが検出された。一方、試料No.2、3では2400、500個/gに留まっている。対比試料のうち、地山から採取した試料No.1-2では500個/g、上位の耕作層（試

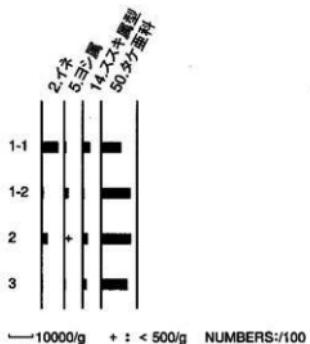


第119図 調査地点の位置

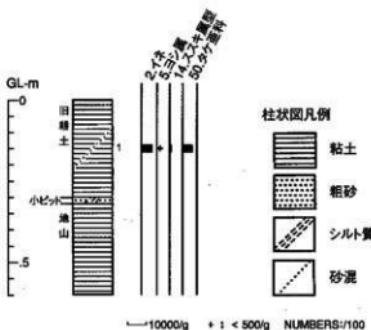
• No.4-1(対比試料)



第120図 試料採取地点



第121図 平面採取のプランツ・オバール  
ダイアグラム



第122図 No.4地点のプランツ・オバール  
ダイアグラム

料No.4-1) からは6400個/gのイネが検出できた。

## ②ヨシ属

全ての試料で検出されたものの、400～1500個/gと少量であった。

## ③スキ属型

全ての試料から検出され、一部の試料では2000～3000個/gの検出量を示す。

## ④タケ亜科

5600～12800個/gと多量に検出された。

## 小ビットの成因について

小ビットについて「稻株跡」の可能性が指摘され、その真偽を確かめることが今回の分析の目的であった。以下では小ビットの成因を踏まえ、「稻株跡」であるか否かについて考察する。

## ①観察結果および分析結果の整理

### 1) 観察結果

検出面での小ビットの形態は不定であり、決まった形態を示していない。また、No.2、3の様に2重構造が認められるものもあった。さらに、遺構面全体に不規則な分布をしている。

断面では、地山に対し数cmの深さのもの（No.1-1）と、1cm以下のもの（No.2、3）があった。

前述のように、小ビットは粘土の地山に対する数cm以内の窪みであり、シルト質粗粒砂で充填されている。また、小ビットおよび地山は弥生時代終末期から古墳時代中期の「耕作土層」（砂混粘土）で被われている。

### 2) 分析結果

地山から得られたイネの濃度は500個/gと低い物であった。上位に耕作土層が厚く存在することから、ここから混入した可能性が高い。また、「耕作土層」からは6400個/gという高濃度でイネが検出

されており、間違いなく「耕作土」であることが判る。

小ビットのうち、深さの深いNo.1-1からは6900個/gという高濃度でイネが検出されるものの、深さの浅いNo.2、3からは2400、500という、比較的低濃度での検出であった。

## ②小ビットの成因

### 1) 小ビットの充填物

小ビットの充填物は、地山、上位の耕作土層とは明らかに異なる。また地山からのイネの検出量が少なかったことから、地山は直接耕作と関係のない層であると考えられる。従って、現在は削平を受け存在しない層（以下「削平層」と記述）が地山上面に分布し、そこからの根および茎その他の抜けた（あるいは朽ち果てた）跡に「削平層」が充填されていると考えられる。

小ビットの成因については、「稻株跡」説の他、「根跡」説、「踏み込み跡」説が有力であると考えられる。これら諸説では、「削平層」が耕作土であれば必ず小ビット内にイネが含まれることになる。一方、「削平層」が耕作土でなければ、「稻株」に由来しない限りイネが含まれることは無い（現在地山と小ビット上位に存在する耕作土から小ビット内にイネがもたらされたとは、地山に含まれるイネの量があまりにも少ないことから、否定される。）。ただし、「稻株」の存在を肯定すれば「削平層」は耕作土になり、矛盾が生じる。したがって「削平層」は耕作土であり、何らかの作用で出来た小ビット内を充填していると考えられる。

### 2) 小ビットの配置からの推定

「稻株跡」であると仮定した場合、例えば「苗植え」であるとすれば、現在見られるように規則性が認められるはずである。しかし「直播き」であれば、その分布・配列には規則性が認められないはずである。また、数年に渡る耕作痕が重なっていると考えれば、規則性は認めにくくなる。したがって、今回小ビットの分布に規則性が認められなかつたことからは、「稻株跡」の可否は判らないことになる。

### 3) イネの濃度の差について

小ビットのうちNo.1-1からは6900個/gと高濃度のイネが検出されている。一方で、No.3では500個/gと低濃度である。

両小ビットの形態は、前述の様にやや異なっており、No.1-1がNo.3に比べ深く、シルト質粗粒砂の充填部分も多い。No.1-1がNo.3に比べ深いことから、「稻株」のより高い位置まで残ったために、多くのプランツ・オパールが小ビット中に残った。またNo.3では稻株の根付近のみ残っており、小ビット内のプランツ・オパールの残りが悪かったと考えることも可能である。

ただしNo.2はNo.3と同様に浅いが、イネの濃度は2400個/gとやや多く、先の説明のみでは理解できない。

No.2、3ではタケ亜科の濃度が高い。この傾向は地山（No.1-2）と類似する。No.2、3では小ビットの深さが浅いことから、地山からの擾乱に伴う混入の影響が強く表れ、地山由來のタケ亜科が混入した可能性も指摘できる。No.2、3の差は、単なる試料中の偏りや、他層準からの混入による影響とも考えられる。

### ③まとめ

今回の分析で目的に対する明確な回答はできなかった。

ただし、いくつかの仮定（①稻株（跡）の残り方に差があった。②試料中の偏りが存在する。③他層準からの混入があった）が成り立つならば、小ピットを「稻株跡」とすることも可能である。

また仮定を事実と確認するためには、小ピットの形態を細分し、より多くの分析を行う。上位の耕作土層内、地山内のプラント・オパールのばらつきを確認する。ことなどが必要であろう。

### まとめ

3区に多数分布する小ピットの成因について考察した。考察の結果、小ピットが埋まる過程はほぼ想像がついた。ただし、小ピットそのものの成因については「稻株跡」説、「根跡」説、「踏み込み跡」説があり、現状でははっきりしない。ただし、いくつかの仮定に基づけば「稻株跡」と考えることが可能である。

「稻株跡」とするためにには、今後さらに現場での詳細な観察と自然科学的分析が必要である。

### 引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の硅酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

## 2. 井原遺跡におけるボーリング調査

峰松拓史（川崎地質株式会社）

### はじめに

本報告は出雲市芸術文化振興課文化財室が、埋没河川の実態を明らかにする目的で川崎地質株式会社に委託して実施したボーリング調査の速報である。

今回は速報として、コア観察の成果のみから地質断面図を作成した。現在実施中の花粉、珪藻などの微化石分析の実施により、さらに詳細な地質断面図が提示できる可能性があることを付記しておく。

井原遺跡は島根県出雲市西部の白枝町地内に立地する遺跡である。ボーリング地点を第123図に示す。また、発掘調査により明らかになっている埋没河川の肩部、同時に調査したⅢ区の位置も示している。



第123図 ボーリング地点

### 試料の採取

観察と微化石分析に耐えうる試料を採取するために、シンウォールサンプラーを用いて試料を採取した。試料採取にあたり、パイロットボーリングを事前に実行サンプリングの効率を図った。

### 試料観察結果

第124～第126図に観察結果を地質柱状図として示した。さらに第127図に地質断面図を示した。以下に、地質断面図にしたがい、各層の特徴を記載する。

#### ①河川成中～粗粒砂層

灰色の中～粗粒砂からなる層で、凹地のベースを成す。

#### ②漸移層

黒～オリーブ黒色の砂混シルトを中心とする層で、西部（肩側）ほど厚い。

#### ③湿地成腐植質粘土

黒褐～黒～オリーブ黒色粘土から成る層で、東部ほど底の標高が低い。湿地成と考えられる均質な粘土で、腐植に富む。

#### ④埋土Ⅰ層

ビニールの紐が含まれるなど、スライム状の堆積物である。BP-2およびBP-2のパイロットボーリングでも確認されており、近辺での水道管理設あるいは水路整備に伴う埋土と考えられる。

## ボーリング柱状図

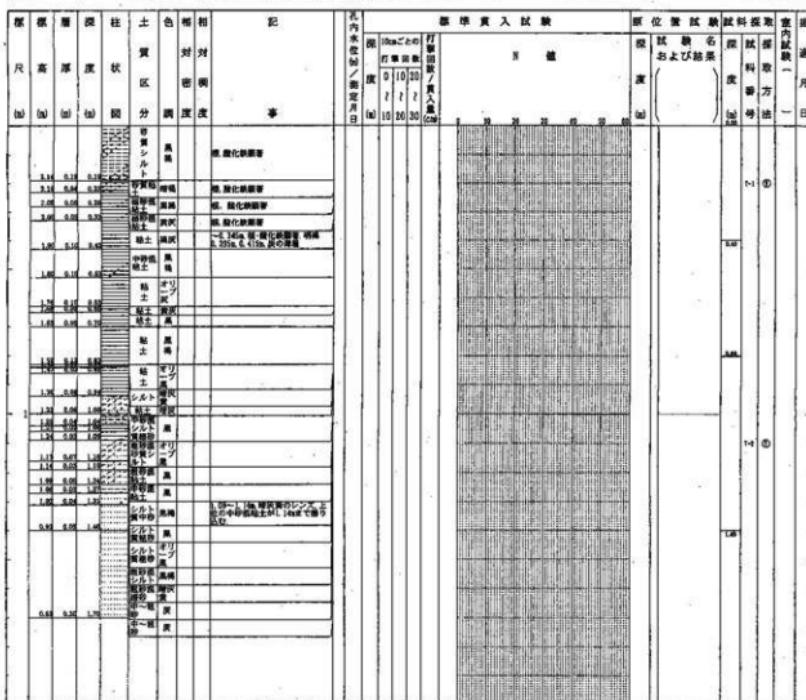
題　　名　井原達蔵監修圖書に伴うボーリング機器充電池

### ボーリング

高級·工業名

100

ボーリング名	3-1	調査位置	島根県出雲市白桜町地内	ゾーン地
発注機関	鳥取県出雲市役所 文化部文化振興課			北 地
調査委託者名	川崎電機株式会社 中部支店 生産技術課			東 地
測量電話番号	(083-242-1111)			西 地
孔 口 深 度	3,250m	角 度	118°	北 地
緯 度	35° 45' N	方 向	W	東 地
経 度	137° 30' E	地 域	N	西 地
水 平 度				南 地
使用機種	KT-3(松研工業)			ハンドル下風向
エンジン	NFM-6-T(ヤママー)			ポンポン
				DS-50(オリビニア工業)



第124図 BP-1の地質柱状図

## ボーリング柱状図

調査名 井原道路発掘調査に伴うボーリング等調査委託

ボーリング場

第125図 BP-2の地質柱状図

## ポーリング柱状図

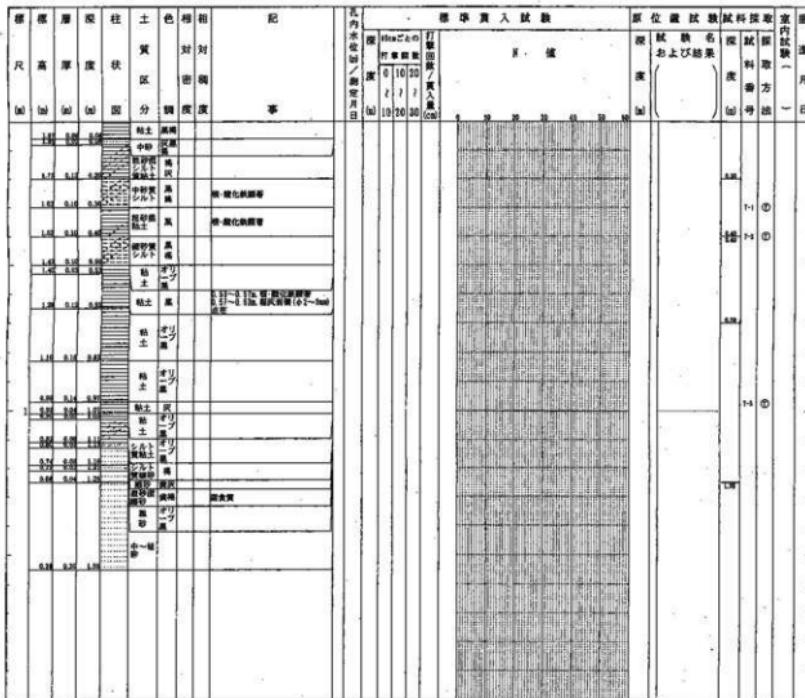
調査名 井原道路発掘調査に伴うポーリング等調査委託

ポーリングNo.					
----------	--	--	--	--	--

事業・工事名

シートNo.

ポーリング名	調査位置		調査期間	測定場所	測定人	測定機器	試験機器	試験方法	試験結果	取扱い
	測定番号	測定場所								
井原地盤調査	BP-3	鳥取県米子市白枝町地内	平成13年9月19日～13年9月19日	第一種						
測定者名	川崎地質株式会社 中嶋文彦 監修 (083-283-7301) 主任技師	峰松 衡史	測定人	峰松 衡史	峰松 衡史	ポーリング 責任者	試験機器	ハンドル 落下用具	トンビ	広沢 健
孔口標高	1.93m	○	方位	東	地盤	水平F	試験機器	エンジン	ボンブ	DS-50(オリンピア工業)
総進尺	1.55m	度	高さ	同	地盤	記述	試験機器	NFAB-7(ヤンマー)	ボンブ	DS-50(オリンピア工業)



## ⑤埋土Ⅱ層

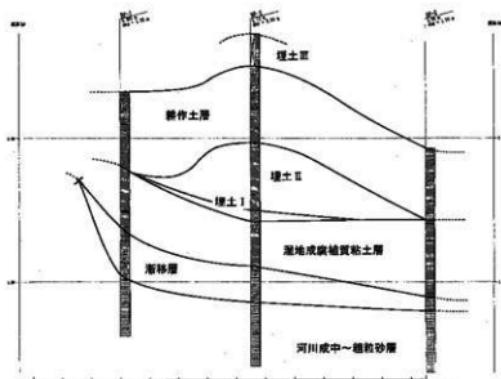
埋土Ⅰ同様にBP-2近辺でのみ確認される。一見均質な粘土であり、湿地成粘土と誤認を生じるが、近代埋土（埋土Ⅰ層）と耕作土層の間に位置することから自然堆積物とは考えにくく、埋土と判断した。

## ⑥耕作土層

砂質シルト～粘土で、根および酸化鉄が認められるなど、典型的な耕作土層である。BP-3では現地表まで続く。

## ⑦埋土Ⅲ層

BP-1、2で耕作土層を被う。ただし、BP-1では掘削に先立ち本層準を重機により掘削した。



第127図 地質断面図

## いわゆる「旧河川」の堆積物について

今回のボーリングにより、地山（河川成中～粗粒砂層）の落ち込みと、充填する堆積層を確認した。地山の落ち込みは旧河川の河道跡であり、高まりは自然堤防跡と考えられる。

地山に続く漸移層は砂混シルトを中心とする腐植に富む層である。上位に続く湿地成粘土層には河川の影響がほとんど認められないのに対し、粗粒物質が含まれる点で、漸移層には河川の影響が認められる。したがって、「旧河川」に伴う堆積物は漸移層まであり、湿地成粘土層は旧河川跡の湿地に堆積したと考えられる。

出雲平野内の旧小河川の多くは、斐伊川、神戸川が「神門水界」に流れ込む平野部で形成された網状河川や蛇行河川の一部であると考えられる。出雲平野内の発掘調査に伴い発見される「旧河川」は、今回の発見された「旧河川」と同様の堆積状況を示し、旧河道跡と考えられる窪地内を湿地成粘土層が埋め、上部で耕作土層へと移り代わっている。

湿地成粘土層は、蛇行河川の流路変更に伴う三日月湖化や、「神門水界」の水位上昇に伴う流量減少などに起因して堆積を開始したと考えられる。

# I 区 図 版



I区東側　構造検出状況空中写真



I区西側　構造検出状況空中写真

図版2



I区空中写真（北から市街地を望む）



I区2Grビット列検出状況



I区 調査風景



A9Gr SK01遺物検出状況



A9Gr SK01土層断面

図版4



B9Gr SK01遺物出土状況



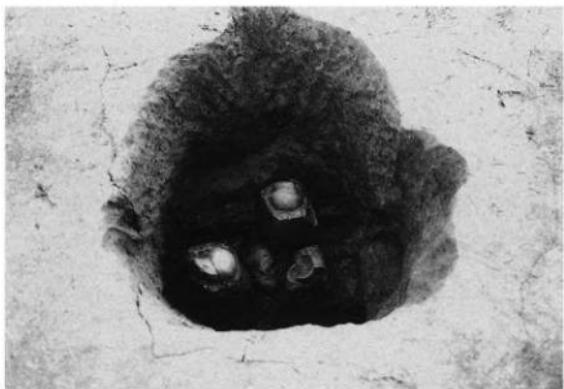
B9Gr SK01土層断面



B9Gr SK01完掘状況



C12Gr SK03土層斷面

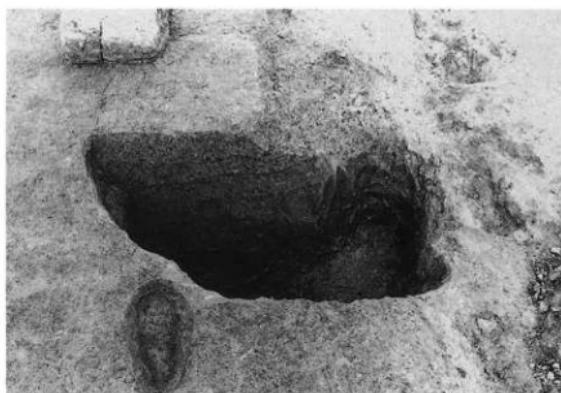
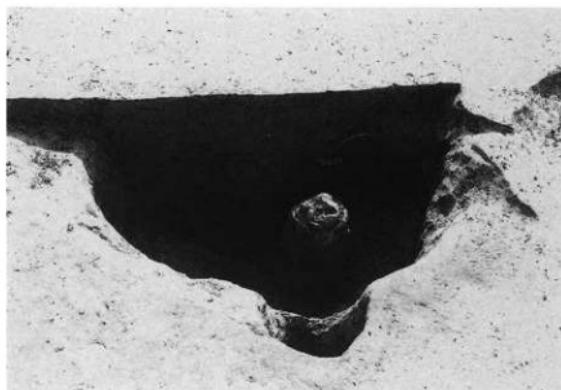


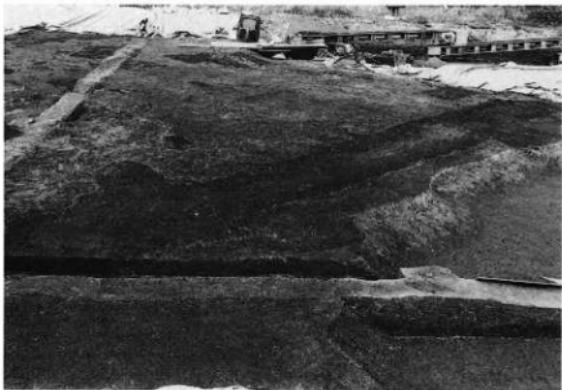
C4Gr SK01遺物出土狀況



A4Gr SK01遺物出土狀況

圖版6





SD01構造検出状況



SD01土層断面



SD01完掘状況

図版8



SD03遺物出土状況



SD03土層断面



SD05～SD07検出状況



SD04遺物出土状況



SD03遺構検出状況



SD04棟出状況

图版10



A5Gr P01遗物出土状况



B2Gr P10・P11土层断面



B3Gr P02・P03土层断面



図版12



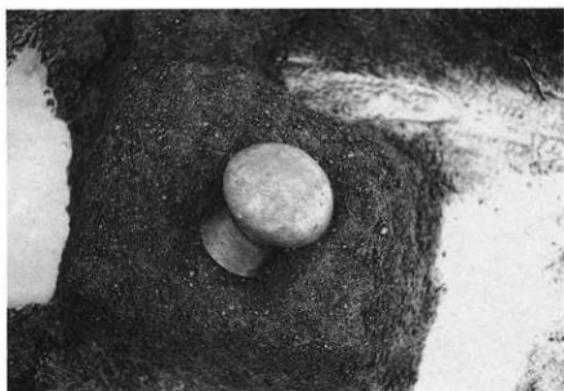
SD10・SX12検出状況（南から）



SD10遺物出土状況（部分）



SD10遺物出土状況（部分）



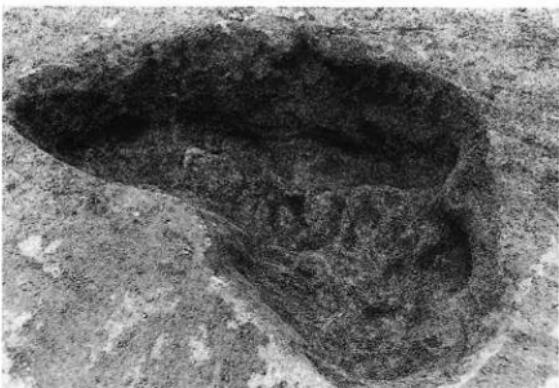
图版14



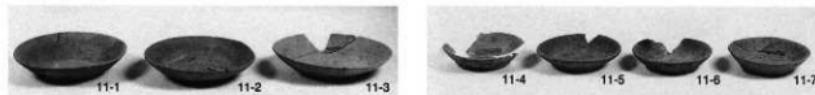
SX12检出状况



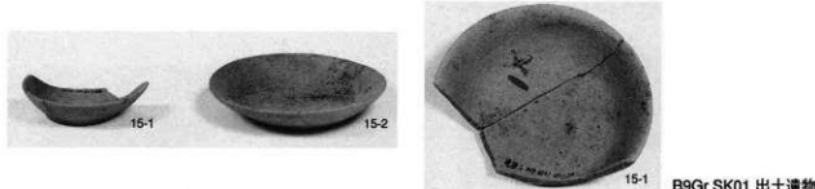
A11Gr P01完掘状况



B11Gr P01完掘状况



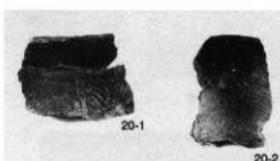
A9Gr SK01 出土遺物



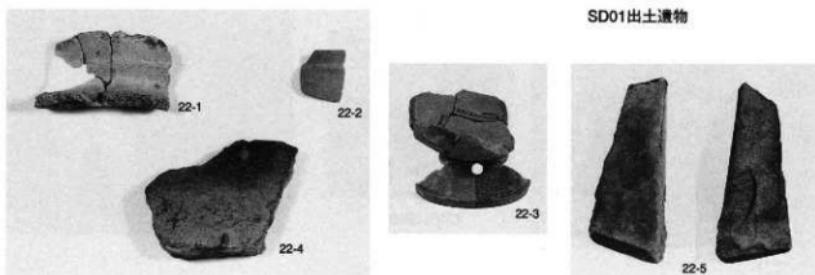
B9Gr SK01 出土遺物



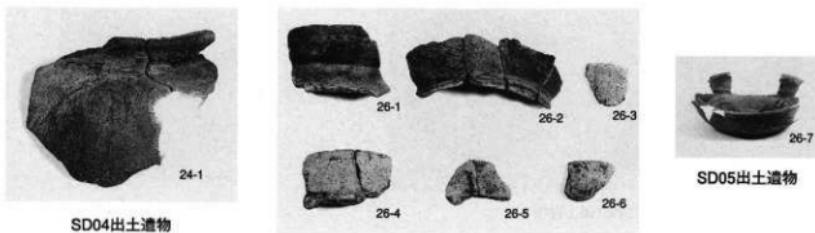
C12Gr SK03出土遺物



SD01出土遺物



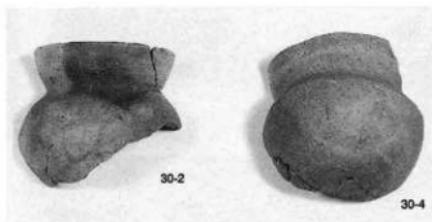
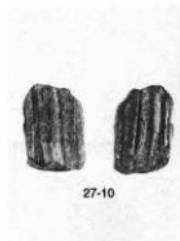
SD03出土遺物



SD04出土遺物

SD05出土遺物

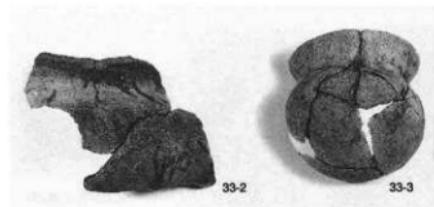
図版16



SD05出土遺物



C4Gr SK01  
出土遺物



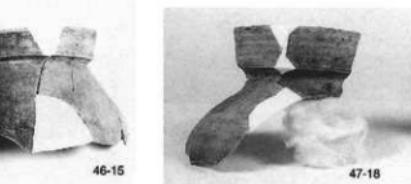
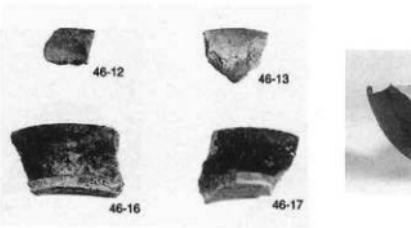
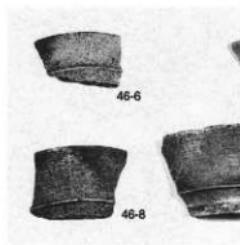
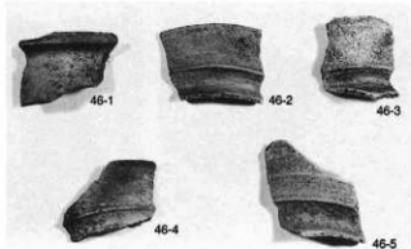
A4Gr SK01出土遺物



C3Gr P05出土遺物

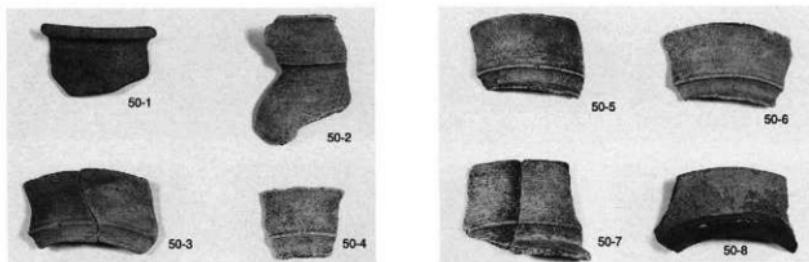
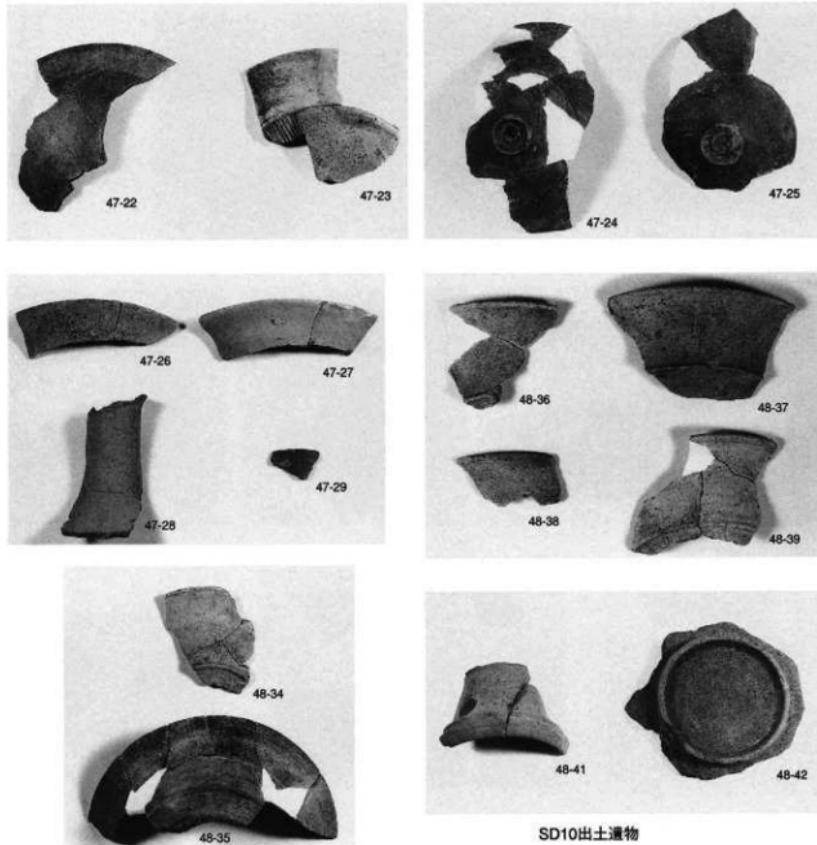


B5Gr P01出土遺物

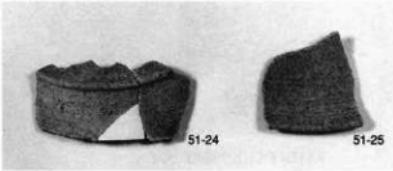
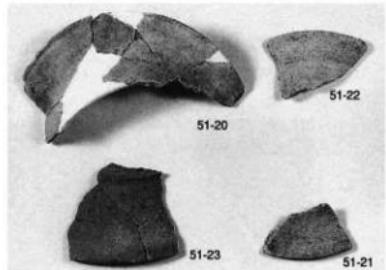
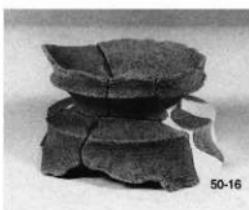
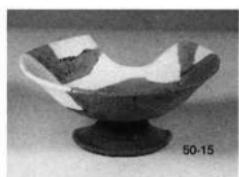
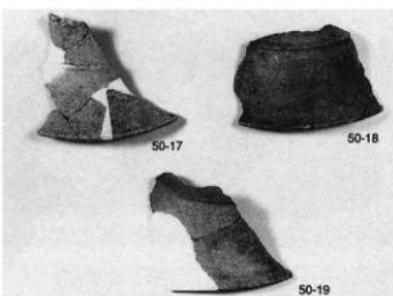
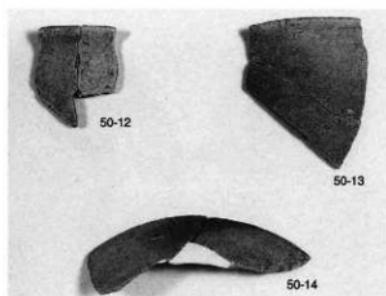


SD10出土遺物

圖版18

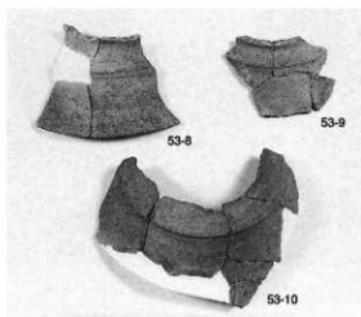
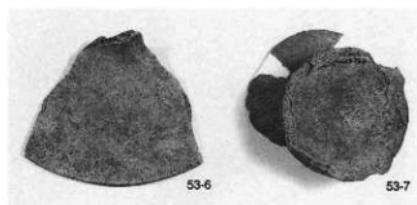
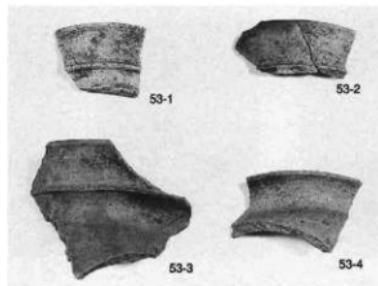


SX10出土遺物

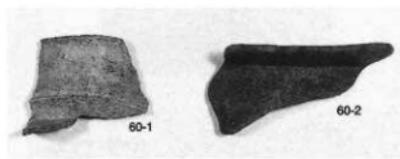
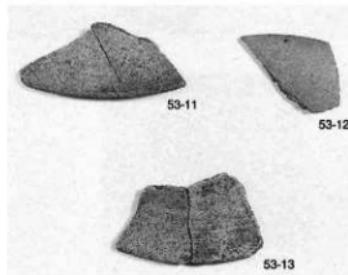


SX10出土遺物

図版20



SX12出土遺物



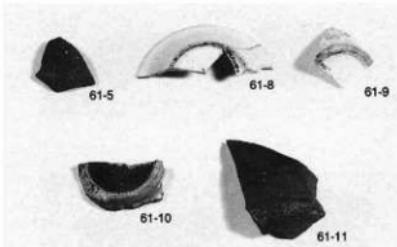
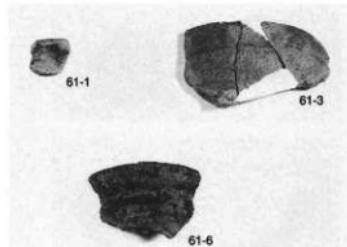
A12Gr P01出土遺物



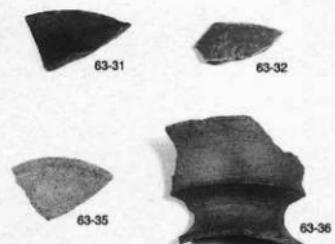
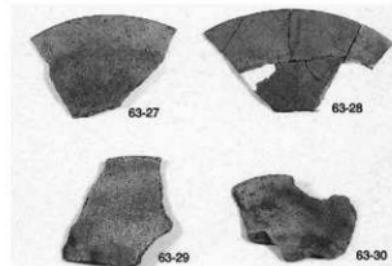
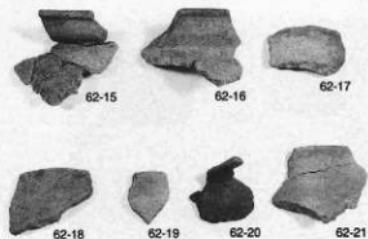
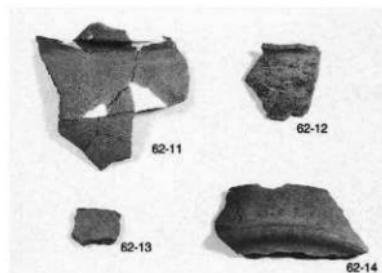
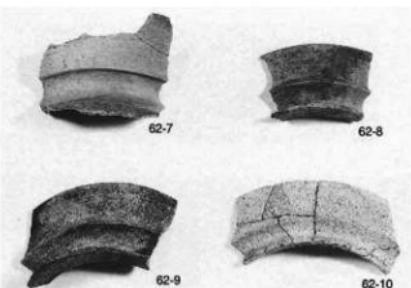
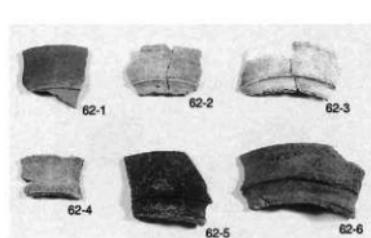
A11Gr P14出土遺物



遺構に伴う出土遺物

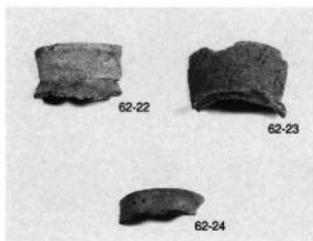
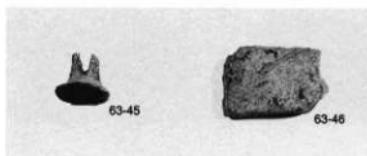
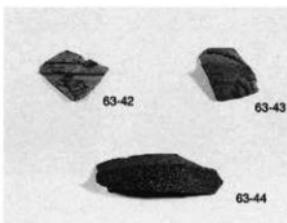
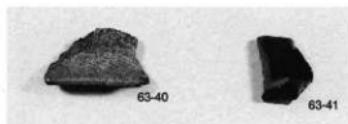
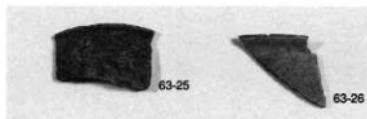


造構に伴う出土遺物



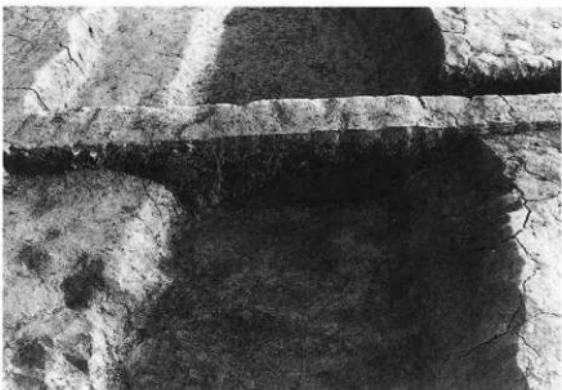
造構外出土遺物

圖版22



造構外出土遺物

# II 区 図 版



SD01土層断面



SD01遺物出土状況



SD01遺物出土状況（部分）

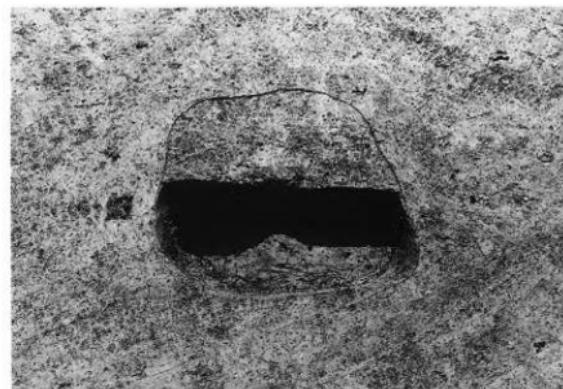
图版24



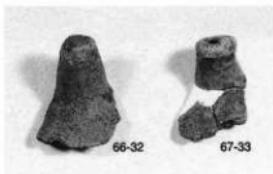
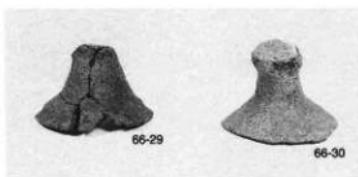
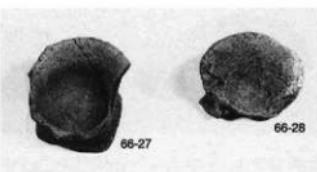
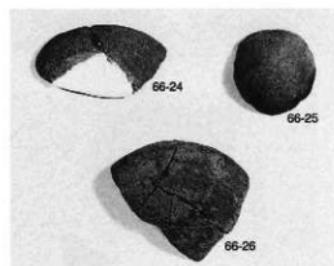
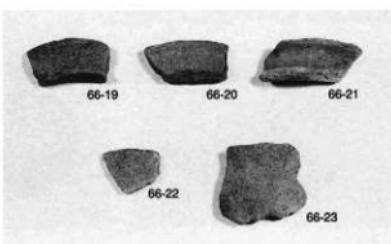
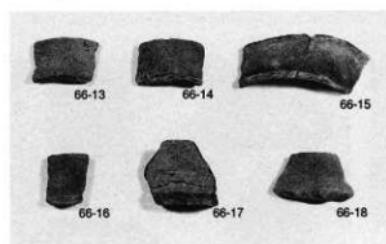
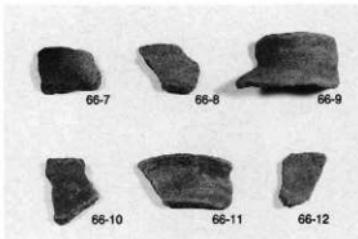
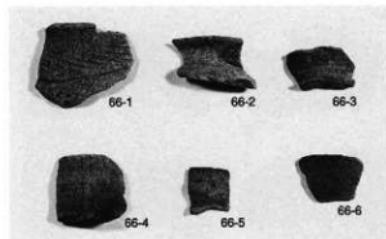
SD01遗物出土状况（部分）



SD01完掘状况

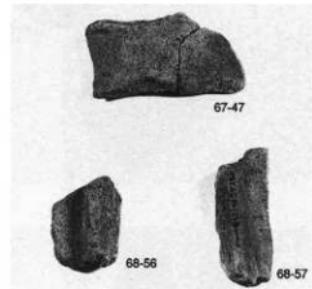
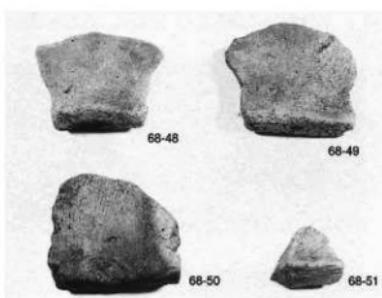
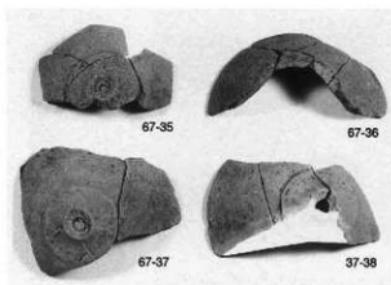


P03土层断面

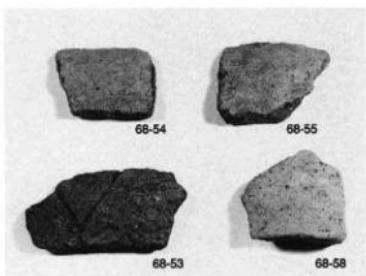


SD01出土遗物

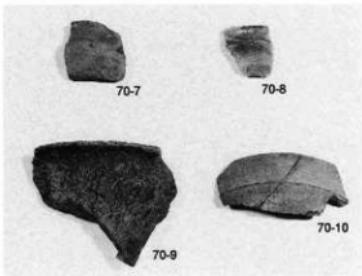
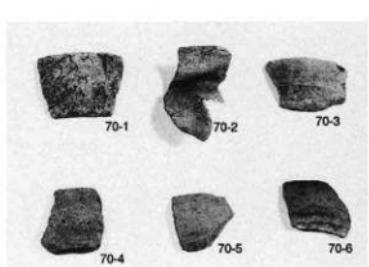
图版26



SD01出土遗物



SD01出土遺物



遺構外出土遺物

# III 区 図 版



III区 遺構検出状況空中写真



III区 遺構検出状況（西から）